

異世界に、不死を想う

堀吉之助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昭和18年。洋上で嵐に見舞われた駆逐艦の上で男は天を仰ぐ。
その男は部下援けるために身を乗り出しところを波に攫われた。
次に目を覚ました場所は異世界だった。

※小説家になろう様にも投稿しております（各話タイトルが別）

目次

言葉の通じない世界	1
薄暗い牢獄の中で	18
しのびよる惨劇の前に	27
ただ、当たり前のように	38
闘争の形	43
グリフォンの脅威	50
絶望の空	61
鉄の魔王	68
魔王のこと	78
守るべきもの前	86
守るべきもの中	98

言葉の通じない世界

雨が、降っていた。

大粒のそれは甲板に叩きつけられ、音を鳴らす。洋上に浮かぶその船の甲板にはまるで川のように水が流れていく。

波は荒い。船、いや正確にはその駆逐艦を揺らしていた。

人類の作った鋼鉄の船も大海原の中ではいつ沈んでもおかしくない。甲板の上では水兵達が行きかう、それぞれが何かの役割をもち、沈まぬようにただ各々が努力している。その中に独り、天を仰ぐ青年がいた。

精悍な顔つきの将校だった。紺色の軍服に身を包み、短刀を腰に佩いている。手には白い手袋をはめている。彼は天を睨んだまま何も言わずにわずかな時間佇んでいた。軍帽のつばを掴んで、つぶやく。

「天次第か」

短くそう呟き、周りの部下達へ指示を出す。彼には軍人としての義務に忠実であった。波がうねりをあげ、駆逐艦に押し寄せる。そのたびにどこかで誰かの悲鳴が上がる、それは「彼」の目には届かないところでのことだった。波にさらわれたか、ただ驚いているだけかはわからない。

船が揺れる。その時だった。彼、秋山秀作は押し寄せた波に攫われそうになる水兵が眼に映った。

気が付いた時はすでに駆けだしている。彼の身のこなしは俊敏だった。手すりを片手で握り、船の外に投げ出されそうになった水兵の手を掴むと、そのまま甲板に引き上げる。

「秋山中尉殿！」

水兵が叫ぶ。秋山は力任せにその男を甲板に投げる。流石に助け方に気を遣っている余裕はなかった。彼は軍艦の壁にあたり、せき込んでいる。その周りには仲間の水兵達が彼の周りに集まった。秋山は口には出さないがほっとした表情をした。ただ、はっとして軍帽のつばを指でつかみ顔を隠す。

ぐらり、船が揺れた。

秋山はその瞬間、不意に体が浮くような錯覚を覚える。

「！」

すぐに自らの体が船から落ちていているいることが分かった。曇天の空が見える。兵士たちの悲鳴と秋山を呼ぶ声がある。

——ああ、なんて間抜けなことを。

秋山は手を天に伸ばして、そう思った。国に対しても、父母に対してもなんら恩を返せずに散るのかと、わずかな時間に悔いる。だが、すぐに海面に叩きつけられ海に沈む自分がわかった。

波にのまれ上下がわからない。

(くっ)

泳ごうにも水流で体が文字通り回る。口を開けてしまった拍子に漏れた泡が目の前を覆う。途端に息が苦しくなった。秋山はただ、暗い海の中で手を伸ばす。それは何かを掴もうとしたのではない、ただただ今できる「最善」を行おうとしただけだった。

その手を誰かが掴んだ。この海の中でそれを秋山は感じた瞬間に、意識がふつと遠くなるのを感じた。

☆

川のせせらぎが聞こえる。

秋山は顔にあたる砂の感触に目が覚めた。朦朧とする意識に首を振って、自らの頬を叩く。軍服は水を吸って重い、砂の上に座りなすど目の前には小川が流れていた。周りを木々に囲まれたその中を一匹の魚がすいっと泳いでいく。

秋山は思った。

「三途の川……？」

海に投げ出された自分が川にいるはずがない。そうならばここはあの世だろうか。彼は急いで足を見ると自らの「足」はちゃんとついている。どうやら幽霊というわけではないらしいと、原始的な確認をする。彼は上着を脱ぐ。中に着ていた白いシャツが見える。

彼は腰の短刀を確認してから立ち上がる。どうみても森の中である。考えられるとすれば奇跡的に島にたどり着いて川を逆流したのだろうか、彼はそこまで考えてくすりとする。それではあまりに自分が滑稽な動きをしている。

がさり、音がするとともに秋山はそちらを見る。手は短刀をにかけ、腰をわずかに落とす。

「ひっ」

そこにいたのは少女だった。大きな瞳と白い肌をした可愛らしい彼女はフードを頭にかぶっている。そこから出ている栗色の髪がきらきらと光っている。

「外国人……？」

秋山はふと自分の手を見た。あの「投げ出された瞬間」に誰かに手を掴まれた気がする。もしかしたらこの少女がそれをしてくれたのかもしれない。秋山はこぼんと咳払いして、英語で彼女にはなしかける。それはゆっくりと、挨拶と場所を尋ねるものだった。

『?????』

何か叫んで少女は木の後ろに隠れてしまう。顔半分を出して、ちらちらとこちらをうかがっている。秋山はさらにゆっくりと言う。

『ここはどこでしょうか？ 助けてくれたのは貴女ですか？ 私は秋山です』

『だわっら、ぱるたらんと？ アキヤマ？』

秋山は思わず「は？」と言ってしまう。少女の言った言葉が理解できなかった。ただ、自分の名前だけは通じたらしい。秋山は英語だけでなくわかる言葉を使っていくつか質問を試みるが、話を通じない。最後には薩摩弁までつかってみたが、少女の大きな瞳は困惑で泳いでいる。

「参ったな。これは、どこに流されたのかわからない」

濡れた軍帽を脱ぐ、短く切った黒髪が陽光に光る。秋山が空を見ると木々の間にしっかりと日が昇っていた。先ほどまでの曇天は嘘のようである。ただ、それを疑問に思っても晴れているものは晴れていると秋山は思った。

『アーエ……アーエ……アーエ……！』

突然少女が木の間からおずおずとでてきて、同じ言葉を繰り返す。

どうにも頑張つて「アーエ」と言っている。

「アーエ……もしかして君の名前？　　つと言葉は通じないか」

秋山は自分を指さして「あきもと」と言う。その後には少女をゆつくりと手で示し、「アーエ？」と優しい声音で聞く。すると少女の目がぱちくりとして、口を開けて、嬉しそうに笑顔になる。

「あう。あう！　アーエ、アーエ」

「そうか、アーエさん」

名前をわかってくれたのが嬉しかったのかアーエは何か言いながら川を指さす、その後には秋山を指さす、それを繰り返した。

手で泳ぐようなしぐさしたり、両手をあげてあうあう言ったりする。なんらかのジェスチャーらしい。必死なのだろうが、表情も苦しそうだつたり嬉しそうだつたりころころかわるので単純に可愛らしい。秋山はくすりとする。

「うーあんどる　あ　かーま　べんど」

するとアーエはちよつと膨れて怒つたような顔をする。人が真面目にやっているのに何を笑っているのか、秋山はそう言われた気がした。

「いや、申し訳ない。私がおぼれていたところを君が助けてくれたんだね。ありがとう」

素直に秋山は頭を下げる。軍人らしく背筋を伸ばし、必要以上に儀礼的なものだったがそれは癖のようなものだ。本当に感謝していることには間違いない。

アーエは逆に「あうあう」となにか困惑したような顔をしている。

あまりに丁寧に頭を下げられたからか、ただ感謝されていることはわかるらしく頭を掻いたり、横を向いたり、照れくさそうな表情をしている。とにかく表情がころころ変わる。

「うーら」

なぜだろうか秋山にはアーエがお礼を言っている気がした。「こちらこそ」のような言い回しをしているような気がする。ただアーエが頭を下げると、フードが取れる。

「なっ!？」

驚く秋山。その視線の先にはアーエの頭の上にある猫のような大きな耳。彼女は逆にキョトンとした顔をしている大きな瞳に秋山の顔が映っている。秋山は思わず彼女に近づいて、その耳を触る。

「!!!」

何か叫んで後ろに下がるアーエ。彼女は両手をあげて威嚇しているようなふりをしている。耳がぴんと立っている。秋山その手に残る感触に驚く、猫の耳としか思えない。作り物かもしれないが、そうは見えないしこの少女がそこまでする理由がわからない。

「君は……な、なんなんだ？」

アーエは栗色の髪を手で整えて、ぴくぴくと猫のような耳を動かす。どうやら作り物ではないらしい、秋山は驚くしかなかった。

(俺は、魔性の世界に迷いこんだのだろうか)

子供のころ聞いたことのある「猫また」という妖怪を思い出す。彼のおぼろげな記憶では年老いた猫が人の姿に化けるといふ話だった気がする。しかし目の前の少女はちよつと膨れた頬のまま横目で秋山を見ている。どう見ても恐ろしい妖怪とは思えない。

アーエは自分の耳を指さして、手をばたばたさせる。「なーなー」と猫のような声を出しているが、おそらく現地の言葉なのだろうと秋山は理解した。怒っているようなしぐさはアーエのジェスチャーなのだろう。

要するに触るな、ということらしい。秋山はすぐに理解して、婦女子に対して失礼なことをしたと素直に反省した。

「これはすまない」

かるく頭を下げると、アーエはなんでか嬉しそうにしている。お互いにやり取りできるのが楽しいのかもしれない。彼女は両手をわざとらしく組んで「あうあう」と首を縦に振る。かわいらしい満足げな顔をしている。

秋山はその姿にふつと笑う。ただ、すぐに思ったことは「原隊への復帰」ということだった。ここがどこかはまるで分らないし、敵軍の占領地の可能性もある。生きているのであれば自らの仲間のもとにもどらなければならぬ。

秋山はアーエに身振り手振りでここはどこか問う。アーエは最初何を言われているかわからないという顔をしていたが、真剣に秋山を見ていた。どことなく秋山が何を言いたいのか当てたいという純粹な好奇心も見え隠れしながら。

アーエは両手をどこかを指さす。それは森の方向だった。彼女はそちらにたたたと軽やかに走り始める。たまに後ろを振り向くのは秋山を誘っているのだろう。

「案内してくれるのか？」

秋山は脱いだ上着と軍帽を小脇にかかえてついていく。

アーエはすいすいと森の中を走って行く。背が低いからか、枝の間を行く。逆に秋山はいちいち立ち止まってはくぐりぬけていく。アーエが走ると落ち葉が舞う。楽しそうに走る彼女の後姿に秋山はひさしく忘れていた日常のようなものを想った。

「うー!!」

「どこに行くんだい？」

秋山は自らの国語で問う。軍人として鍛えた彼には余裕がある。もちろん通じないことはわかっている。彼は目の前に岩があれば飛び越え、慣れてきたのか木々をよけながら走る。すぐにアーエの横に並んだ。

アーエは驚愕の表情をしている。走りながらぽかんと口をあけて秋山を見る。そしてすぐにむつとして、たたたと前をいく。

(ああ、追いかけてっか)

言葉は通じなくてもあの表情を見ればわかる。

秋山はむきになって走る少女の後ろをついていく。時折、少女は後ろをみて意外と近くにいる秋山に不満げな顔を見せる。彼女はそなたびに走る速度をあげる。ただ、少し息切れをしているように見えた。

「!？」

アーエは足をもつれさせる。転倒しそうになった彼女を秋山は片手で抱きかかえた。一瞬、彼女の大きな瞳が彼を見る。ほんのり顔を赤くしつつ、ぱつと離れる。

「大丈夫かい？　あまり無理をしてけがでもしたら、親御さんに申し訳が立たない」

「？」

言葉が通じないのは仕方がない。ただ、アーエはじつと彼を見て、何かを考えている様子だった。「あー」だとか「えー」だとかいいながら、顎に手をあててそわそわしている。

「あ、あ、ア리가トオウ？」

秋山のまねだろう。今度は秋山が驚かされた、先ほどの彼の言葉を彼女はお礼と理解しているのだとわかった。思わず彼は顔をほころばせた。通じたことが分かったアーエもにこつとして、頭を掻く。どことなく照れくさそうだった。

アーエと秋山は山道を歩きだす。お互いに言葉は通じないが、身振り手振りでなんとなく通じることは分かった。時折この猫耳の少女が指さす方向に彼女の家があるのだう。それが大きな街であれば原隊へ戻ることができるともかもしれない。

むろん秋山はこの少女が連れていこうとしている場所に「敵」がないとは限らないと理解している。武装としても腰に佩いた短刀しかない。これは指揮用のというよりも儀礼的なものである。

☆

山道をしばらく歩いていると遠くに煙が上がっているのが見えた。人里が近いのだろう。アーエはどこで拾ったのか枝をふりふりしながら先導している。終始ご機嫌そうに秋山には見えた。彼女はいきなり何かを叫び駆けだした。

「転ばないように気を付けてくれ」

あつと秋山が言ったときにはすってんころりんとアーエは転んでいた。鼻をさすりながら立ち上がる彼女に近づいて、秋山はハンカチをポケットから取り出す。ほのかに香る海のおい。彼はやはり自分が海に投げ出されたことを想った。

それはそれとしてこの海水を含んだハンカチで拭くのはどうかと秋山の動きは止まる。その時、アーエの手が彼の手首をつかんで、ぐいと引く。

一緒に駆けだした二人、

「お、おい、なんなんだい？」

森の出口は小高い丘のようになっていた。そこから見下ろせる景色に秋山は息をのむ。

そよ風になびく黄金の草原。

眼下に広がるのは小麦畑。その間に大きな街道が一本遠くまで伸びている。その先にあるのは城壁に囲まれた街だった。西洋で言う城塞都市だろうか、秋山は感動と混乱の入り混じった頭でなんとか冷静に思考する。

「アーエ」

「んー」

名前を呼ぶとアーエは彼の前にきて、小麦畑を背景に両手を広げて、にっこりと笑う。まるでどうだと言っているかのようだった。秋山はその姿を単純に好きだ、と思った。彼はミッドウエーからここまで軍人としての任務を果たし続け、久しぶりに見るその笑顔に心から癒されるような感覚を彼は覚えた。

彼はここがどこかはわからない。だが、この小麦畑を目に焼き付け

ておきたかった。

ただ、そんな彼の心の中などわからないアーエは、してやったりとした顔でふふーんと鼻を鳴らしている。アーエは秋山の手を掴んで、平和な、ただ平和な光景の中に引っ張っていく。

小麦畑の間の街道を歩く。心地よい風が麦畑そよがせている。麦畑の間で働く人影が見える。

「のどかだな」

秋山は率直に思った。目の前の歩くアーエはまだ木の棒を振り回している。危ないと注意しようかと思っただが、可愛らしい姿に躊躇してしまう。後ろから見ると頭のような猫の耳がぴくぴくと動いている。ご機嫌なのだろうか、秋山はゆつくりとそう考えた。

馬車が行き過ぎる。からからと大きな車輪を鳴らしながら。秋山は御者と目があい、なんとなく会釈すると相手も軽く頭を下げた。その様子を見ていたアーエは秋山の真似をしてだろうか、通り過ぎていく馬車に頭を下げる。

なんてことのない道の中です太陽は傾いていく。だんだんと光を強くしているのは夕日に変わろうとしているからだろうか。遠くに見える街の城壁は影を帯びて暗く見える。

「しかし、ここはどこなのだろうか？ 東南亜細亞にこのような地域があるとは聞いたことがないが……」

秋山は出征する前に地理について一通り頭に入れている。ただ、広大な麦畑を擁する城塞都市など聞いたことがない。街道で人々とすれ違うが、彼らは秋山を珍しそうに見てはそのまま通り過ぎていく。日本人など珍しくないのか、それとも興味がないのだろうか。

☆

城壁までくると大きな壕を巡らした防衛施設を持っていることが分かった。街の入り口は橋がかかっており、鎖で巻き上げる仕組みになっている。ようだった。その橋の前に兵士が数人立っている。彼らは手に槍を掴み、鎧を着ている。

「西洋……甲冑……？」

秋山は驚愕した、その装備の「時代遅れ」ぶりはどうしたことだろうか。槍などで防げる軍隊などどこにもいない。どう見ても銃の類を彼らはもってはいない。あるいは儀礼的な部隊なのだろうかとは思った。

兵士の集団は談笑しながら、固まっている。

「あーい!!」

アーエがそこに声をかけると、彼らは振り返って手を振ってくる。知り合いなのだろうか。秋山も軽く会釈する。兵士たちは不審そうにみているものもあつたがとにかく通ることができた。

街の中の中央に大通りがある。そこは商店が軒を連ね、人でごった返していた。

いろいろな店がある、軒先に肉を吊るしているもの、なにかの小道具を売っているもの。武器を立てかけているもの。酒場のようなものなどもある。秋山は人々に肩をぶつけられながら、かき分けて歩いた。アーエはその前をすいすいと歩いていく。ついていくのは結構難儀していた。

「まっしてくれー!」

といったところでアーエは後ろを振り向くと彼女はつかつかと歩

いてきて、仕方ないなという顔で秋山の手を取った。小さな手でぎゅつと握ってくれる。

(まるで俺が子供のようだな)

秋山は苦笑しつつ、アーエに手をひかれるままに歩く。それで多少余裕が出てきたのだろう、人々の様子を観察することができた。アーエのように頭の上に猫のような耳を持つものは大勢いるが、秋山と同じく「人間」も普通にいる。いや、たまに容姿の優れた「耳の長いもの」や異常に背が低く頑健な肉体をしているものなどがある。

「これは、俺はもう死んでいるのかもしれないな」

何度目かわからないが苦笑しつつ、歩く。秋山はどうやら自分は未知の世界に迷いこんでしまったとだんだんと自覚してきた。不安に思ふべきなのだろうが、握った小さな手の温かさがそんな気持ちをどこかに追いやってしまふように感じた。

その時、どこかで悲鳴が聞こえてきた。

アーエと秋山は立ち止まって声のした方を見る。アーエの耳がぴくぴくと動いている。あたりもざわつき始めている。突然アーエは声のした方に走り出した。

「あ、おい！ なんだ」

人ごみを器用にかき分けて走って行く。秋山は流石に手で丁寧に人をかき分けながら。追うがすぐに見失ってしまう。ただ、悲鳴の方向はわかる。彼はそちらに向かうべく行動する。

周りの人間は聞いたことのない言葉で話している。不意に彼は言いたくない孤独のようなものを感じた。先ほどまで彼の手を引いてくれていた少女がいなくてそれだけでそうなってしまう、自分に秋山はわずかに不甲斐なさを感じる。

ぱちん、両手で両ほほを叩き。

「よし」

秋山は気を取り直した。

☆

人だかりができている。その中心には大きな体をした男が少女を見下ろしていた。黒髪の少女はボロボロの服を着てるが、その頭には猫のような耳があった。そして男と少女の間にアーエが立ち、両手を広げて何かを叫んでいる。

男は背に大きな剣を背負う。赤銅色の肌に盛り上がった筋肉。体に革の鎧をつけている。男は何かを怒鳴りながらアーエにどくように手で示す。しかし、アーエは首を何度も横に振る。よく見れば足が震えている。

「!!」

男はアーエに手をあげようとした。彼女は目をぎゅつとつむる。がつんと何かを殴る音がしたが、彼女はいたさを感じない。おそろおそろ目を開けてみれば、目の前の秋山の背中があった。

秋山は事情は全く分からない。言葉も分からないので話もできないが、ぺつと赤い血を地面に吐く。そのほほを先ほどのふたれた。だが、その瞳は鷹のようにぎらりと光る。彼は髪を逆立てて叫ぶ。

「婦女子に手を出すか貴様！ 男子として恥ずかしくないのか!!」

その声はびりびりと空気を震わせる。彼を殴った男はうろたえたのかそれで後ろに一步下がった。群衆にどよめきが生まれる。秋山の言葉は通じなくても「何を言っているのか」がその気魄から伝わる。

だが、男としてもこの場を引き下がるわけにはいかないのだろう。彼は大きく腕を振って殴り掛かってきた。秋山は腰を落とし、男の殴打をいなす。そのまま勢いを利用して足を払い、首を掴んで男を転倒させた。

勢いよく倒れこむ男。すかさず秋山はその首の真横を力の限り踏みつける。地面に転がっていた男の目の前を踏みつけることで場合によっては殺すことを示した。頭を踏みつければ、首は折れているだろう。男が恐れを抱いた目で見上げると、秋山はただ冷然と見下ろしている。

「如何な理由があろうと女子供に手を出すなど男子の風上にも置けない。失せろ」

その冷たい瞳に男は恐怖を感じたのだろうか、何かを叫びながらあわてて立ち上がると、どこかに消えていった。しんと静まり返る広場で秋山はふうと息を吐く。軍隊にいれば「このような処置」には手慣れていた。

次の瞬間には歓声が広場にこだました。見ていた群衆は嬉しそうに何かを叫ぶ。秋山は困惑して後ろを見る、アーエが眼をキラキラさせて彼を見ていた。そしてすぐに「んー」と言いながら、抱き着いてきた。ぎゅつと腰のあたりを抱いてからすぐ離れる。

彼女は少女らしくうれしさからか秋山の周りをぐるぐるぐるぐる走り回る。秋山は困惑しつつ周りの手前気恥ずかしさから捕まえようとするが、するつとアーエはよけてしまう。

「いらーら、あつ」

すばしこいアーエを捕まえることができない。その姿がどこことなく滑稽であったりからは笑い声が漏れる。その彼のシャツを引っ張るものがいた。先ほど倒れこんでいた黒髪の少女である。秋山を見な

がら何かを言っている。

アーエは彼女の背中をぽんぽんとたたいて、その猫耳にこそこそと話をしている。秋山をちらつとみて、にやつと笑う。黒髪の少女は秋山に向かいあつて、笑いながら。

「アリ、ガと？」

言った。秋山は笑顔でそれに返す以外に方法がない。頷いたり、ケガをしてないか身振り手振りで確認してみたが、どうにも伝わらない。しかし、アーエが通訳よろしく何事にも間に入ってくるのでなんとなくコミュニケーションはできるようだった。

不意にがちやがちやと遠くから聞こえてくる。甲冑の音だと秋山は思った。その瞬間に当たりがざわざわとしている。

そのざわめきからしてあまり自分に良いものではないと秋山は即座に判断する。

アーエも急に不安げな顔になり、服を引いている、逃げようということだろうか。

遠くに兵士の集団が見える。秋山は少し考えた。腰から指揮用の短刀を外す。それをアーエに握らせて、いう。

「これは大切なものだ。預かっているほしい。君だけは逃げるんだ」

秋山はそれだけを言うとアーエの手を黒髪の少女に握らせて、二人の背を押す。

彼も逃げることはできるだろうが、彼にとってここはどこであるかを確認しなければならぬ。そして、ケガをさせないようにしたとはいえ現地人と喧嘩まがいを起した。その行為が善行として受け入れられるかはわからない。そう軍人らしく秋山は冷静に、そして冷然と自らの行いを見る。

近づいてくる兵士の集団を見ながら秋山はつぶやく。関わり合い

を避けるためか、周りの群衆の中には逃げる者もいる。

「虎穴に入らずんば虎子を得ず、か……」

少なくとも猫の女の子は逃がすことはできる、とふと彼は思った。

薄暗い牢獄の中で

薄暗い地下牢の中。

秋山はベッドに腰を下ろす。ベッドと言っても粗雑に木材を組み合わせただけの固いもの。シーツもなく、枕もない。横になることのできる程度のものだった。だが、彼にとってはその程度のことは何ほどのこともない。

狭い軍艦の中で寝泊まりしていたのだ、むしろ広い寢床にすら思える。牢獄の中は地下ということもあつて暗い。秋山が入っている牢獄と同じような部屋がいくつも並び、真ん中に通路がある。そこに間隔を置いて明かりが灯されている。壁掛けの燭台はすべてに火をつけられてはいない。

(こちらでも節約はするんだな)

などどうでもいいことを想いつつ秋山は目を閉じた。

あの騒動のあとにやってきた兵士の一団は秋山を取り囲み尋問したが、彼も彼らも言葉が通じない。秋山からすればそもそも彼らが駆け付けた経緯すらも分からない。

(あの兵士達にも言葉が通じなかったな)

隊長らしき者もいたが言葉が通じないのは変わらなかつた。多少の地位のあるものならば何らかの反応があるかと思つたがダメだつた。そうこうしているうちに彼はこの牢獄に入れられてしまった。

ちりちりと火に近寄つた虫が焼けている。ほかの独房から酔つた男の怒声が聞こえる。

(アーエは逃げるこゝろができただろうか)

彼は自分のことよりもそれのことが気になつていた。少なくともここには来ていない。秋山は鉄格子をみる。木造であれば何らかの脱出も考えられるかもしれないが、この造りでは逃げることはできないだろう。秋山は固いベッドに横になつた。

「考えようによつては寢床が手にはいつただけ良しとするべきか……。明日からどうすればいいのかわからないのが問題なんだが……。まあ」

なんとかなるだろう。秋山は思った。特に根拠はないが、悲観していても仕方がない。今は体を休めるだけだと彼は目を閉じる。

それからしばらくして、がちやがちやと音が響くのが耳に入った。秋山は眠っているふりをしている。甲冑を着た兵士がこの地下牢に降りてきたらしい、数人いるようだった。彼らは口々に何か言いあっているがその意味は秋山には全く分からない。

がんっ。秋山の檻が勢いよく蹴りつけられる。それから何かを叫ぶ声が響く。

(起きろ、と言ったところか)

言葉はわからないが、何を言っているかはなんとなくわかる。彼はゆっくりと体を起こして牢屋の外を見た。そこには想像した通り、武装した兵士の集団がいる。そしてその真ん中に、一人の少女がいた。

銀色の髪に刺繍の施されたローブ。その青い瞳が秋山をまっすぐに見つめている。その整った顔立ちに秋山はわずかに驚いた。だが、優しく微笑みいう。

「こんな夜更けに何か、御用でしようか？」

銀髪の少女は少し驚いたようだったが、周りの兵士が喚く。それを少女は手で制して、何か言った。すると兵士たちは何か抗議をしているようだったが、しばらくして階段を上がっていった。

(人払いということか、いや、単に彼らが嫌だったのかもしれない)

無駄に威嚇するその姿に彼は内心呆れていた。どうせこちらは丸腰なのである。威嚇しても何も意味はないと、彼は自嘲する。しかし、すぐに背を正し。少女に向かい合う。

「言葉は通じないと思いますが、私は大日本帝国海軍所属、秋山周作中尉です。秋山と呼んでください。秋山、アキヤマです」

「あき、やま」

「はこ」

少女はそれが呼び名とわかったらしく「アキヤマ」と呼んでくれた。秋山は手を少女に向ける。

「貴女のお名前は何というのでしょうか？」

少女は少し考えているようだった。秋山の行動を頭の中で解釈しているのだろう。彼女は鉄格子に手を差し伸べてきた。

「……………」

秋山は立ち上がって彼女の手が届く範囲に手を伸ばす。すると彼女は她的手を掴んで、ぎゅっぎゅっ握りしめてくれた。秋山は苦笑しつつ、握手をり返す。その白い肌、細い指まさに少女の手だった。挨拶を思わぬ形でしてしまった。

「握手がこちらにもあるのですね。ところで私は秋山です。あなたは？」

「……………」

秋山は自分を指で指して「あきやま」といい、ゆっくりと優し気に手を彼女に向ける。

「貴女のお名前は何？」

「……………」

少女の目が^{！！！！}開き、無言で赤くなる。意味が分かったらしい。彼女はジトつとした目で秋山を見つめる。何か言いたげだが、勘違いしたのは彼女である。彼女は言う、異世界の言葉を。秋山はそれをほとんど聞き取ることができない。ただアーエが自己紹介しているときに聞いたような「音」はわかった。

「……………マイ」

「マイ……………いい名前ですね」

たぶん「マイ」であっているだろうと秋山はマイの名前を呼ぶと、彼女はこくりと頷いた。ただこれだけ容姿の整った、そのうえ兵士も従う彼女だ、おそらくそれなりの家柄の者なのだろうと秋山は思った。ただ、ここでの敬称はわからない。

ふと、彼女はローブを被っていることが秋山にはきになった。もしや、その下にはアーエのような「耳」があるのだろうか、ただ確かめ

るような無粋な真似はできない。マイは懐に手を入れて、腕輪のようなものを2つとりだした。

宝石がちりばめられ、装飾の凝ったものだ。それを一つ自分の手にはめる。細い手首にするりとほまる。もう一つを秋山に差し出す。何なのか秋山にはわからないが、それを腕にはめる。

その時だった。秋山とマイの腕輪がまばゆい光を放つ。それは牢獄を光に満たし、やがて消えていった。

秋山は何が起こったかわからなかったが、腕輪を見るとまだ青い光をわずかに放っている。ずきり、その主観に頭痛が彼を襲う。

よろめいて、牢に捕まるとその目の前でマイが同じように苦し気に息を荒げている。桃色の唇から漏れる息が少し艶めかしい。彼女はその青い瞳で秋山を見る。

「わかり、ますか？ 私の、言葉」

ずきり、秋山は頭痛と同時に驚愕した。

言葉がわかる。

秋山はずきりと痛む頭に手をあてて、はあと息を吐く。マイも同じように「あうう」と妙な声を出しながら両手で頭を抱えている。

「あの、私の言葉はわかりますか？」

マイは再度聞いた。秋山は驚きと痛みで声を出すではなく、頷いた。原理はわからないがこの腕輪がマイの言葉を理解させてくれているのだろうか、秋山はそこまで思っ

「これは、魔術……ですか？」

そんなものが現実にあるはずがないという冗談を含めて言った。しかし、そのマイは淡々とした口調で「はい」と答えた。ただ、秋山と同じように頭痛は続いているらしい。

「この腕輪は特殊な魔石でできたものでお互いの精神を仮想的につなげることができます。無理やり頭の中に手を入れられている、あ！」

あうう」

「!!? だ、大丈夫ですか」

「き、気にしないでください。無理に話すことができるように繋がるふ、副作用でこのような頭痛がするだけです。お互いに知らないことや近しい知識がないほど、痛みが激しくなります……まあ、慣れですね。暫くすると痛みは消えていきます」

マイは余裕をみせるためか軽く微笑む。秋山は少なくとも彼女に敵意を感じることはできないと感じる。多少の警戒はしていたが、彼女からならば情報を得ることができると彼は思う。

だが、本当に「魔術」というものが存在していたことに秋山は驚く。荒唐無稽と普段なら切つて捨てるだろうが、話すことのできなかつた人間と意思疎通ができることを思えば、否定は難しい。

「それにしてもこの腕輪はすごい……叩けば文明開化の音でもしそうですね」

「え?、叩かないでください……」

下手な冗談にまじめに返される。秋山失敗したと思いつつも、後ろのベッドに腰を下ろした。マイを見上げると彼女はじつと彼を見ている。長いまつ毛に整った顔立ちがどことなく冷たさを感じさせるが、秋山は彼女の「笑顔」を先ほど見たからか、あまりそれは気にならない。

「失礼しました。……ところでマイさんは私に何か聞きたいことがあったからここに来られたのではないですか? 私にこたえられる範囲であればお答えいたします」

「……そうですか。話が早く助かります。では――」

秋山は自らが質問に受け答えるように話を誘導する。あからさまに聞くよりも話の流れの中から情報をくみ取り、後で不明点を簡単に質問した方が探っている自分の行動をカモフラージュできる。

秋山に促されたマイはいくつかのことを質問した。秋山が何者でどこから来たのか、話している言葉はこの言葉なのか。何を目的に

しているのかなどである。

それに秋山は自らの所属する国家や組織。また、海上から転落して気が付いた時にこの近くの山にいたと話をする。そこで出会った天真爛漫な少女の話は意図的に消した。マイは秋山の言葉に眉をひそめたり、考え込むようなしぐさをしたが特に遮るようなことをせず黙って聞いた。

彼女は手を額にあてて「んー」と一人呟く。痛むのだろう。それから秋山を見る。

「貴方の言う国はどれも聞いたことがありません。無論貴方の言う帝国海軍というものも……」

「……なるほど」

秋山は短く感想を言う。内心では落胆を禁じえなかったが表には出さない。覚悟はしていたが、マイのような女性に「知らない」と告げられると現実に向き合わされる気持ちになる。マイは続ける。

「私は海を見たことはありません」

「……では、なぜ私はあそこにいたのでしょうか？」

「さあ……？ 高位の魔術師の中には転移魔法を使えるものもいますが……それほどの遠距離は聞いたことはありません」

この街はどうやら内陸にあるらしい。マイはそのことを端的に伝えてくれた。しかし、それならば海に落ちた彼がここにいる整合性がまるで取れない。秋山は顔をあげる、天井を見れば黒い。

「最初は自分は死んで、死後の世界に来たかと思いましたが」

マイはその言葉を聞いていう。

「……少なくとも私は幽霊ではありませんし……」

「ああ、幽霊にしてはかわいすぎますからね」

「……」

秋山は軽口を言ってしまった。油断があったのだろう、あつと気が

付いてマイを見ると、彼女はそっぽを向いている。その銀髪を指でつまんで指と指の間でこすっている。特に意味はないのだろう。

「こ、の場合は寧ろあなたの方が幽霊なのではないですか？」

上ずった声で冗談で返してくる。秋山はくすりとして、マイも横顔が少しほころんだように見えた。秋山は一度目を閉じる。

(どうやら完全に俺の知っている世界ではないらしい。ただ、来られたのだから帰ることもできるはず……さて、どうしたものか)

マイからどの程度情報を引き出せるだろうか？ 心の奥底にある軍人としての部分が冷たくささやく。

「ところでマイさんはどのような立場の方なのですか？」

「……私はファロム公国所属の魔術師です。この街には魔物の調査で立ち寄っていました……。たまたま言葉の分からないものがいるということですが……」

「魔物？」

「そうです。……魔物を知らないのですか？」

「ええ、狼も見たことがあります。野生動物と違うのですか？」

「厳密には違いますね。魔力を帯びて凶暴化した動物や、もともとそういう生き物の総称です」

「……この近くにそんなものが」

アーエは大丈夫だろうか。秋山は純粹に心配した。

「この街の周辺では目撃情報があるグリフォンという魔物を調査することになっています」

「グリフォン……どんな生物なのですか」

「どんな魔物……私も絵で見たことがあるだけなので、こう大きなクチバシがあつて、こんな毛の逆立った鳥のような、こうこけーと鳴くとか」

などと言いながらマイは頭に手をあてて、口を開けている。「グリフォン」の真似なのだろう。誰も真似をしろなどと言っていないのに行ったマイの行動に秋山は笑いをこらえたが、無理だった。

「くっ」

「……」

マイは唇を噛んで目を背ける。どうやら恥ずかしい時にはこのようなくさをするとか秋山にはわかった。

「いや、失礼マイさん。しかし、わからないのはこの国、いやファロム公国？ には軍隊はないのですか？ 失礼だがいたいけな女性が危険なことをするのはあまり感心できない」

「……今、私の所属するファロム公国以外の諸国は北方の魔王との戦争状態にあります。このような後方に回す兵力はないのです」

（今度は魔王か）

シューベルトを思い浮かべてすぐ頭を振って秋山は振り払う。魔王について聞こうとするとその前にマイが言う。

「この街の領主とはしては正直貴方の扱いには困っているようです。釈放していいものか、どうかも含めて……そこで提案なのですが、私の調査に同行しますか？ 唐突かもしれませんが」

「調査に同行？」

「はい。聞けばあなたは軍人ということですし、その実力は変な話ではあるけど騒動で証明している。傭兵をつけてくれるという話ですが、傭兵と言うものはあまり信用できません」

「私を信用してくれるのですか？」

「……私は貴方にこの国や世界の情報を与えることができます。あなたにそれが求めているように」

見抜いていたか、秋山は表情に出さず思う。要するに自分の立場を考えればマイから離れれば言葉のわからない世界で情報もないままさまようことになるだろう。いや、そもそも牢屋から出られないかもしれない。つまり利害の面からみても秋山を「信用するに足る」のであろう。

「……わかりました。どちらにせよ私には今行くところがない。お供しましょう」

その時、銀髪の少女はただ目をぱちぱちさせてほんの少し嬉しそうにして、すぐ目を背ける。

「そうですか。それでは明日迎えに来ます。武器は用意して貰いましょう」

声が少し、ほんの少し明るい。秋山はこの少女が不器用なのだなど図らずも純粹に可愛らしく思う。意外と魔物とやらの調査が不安だったのかもしれない。

しのびよる惨劇の前に

その村は山間にある。

街道からは外れ、部会者が立ち入ることは殆どないが、豊かな自然と水の恵みに支えられた場所だった。彼らは都市へは納税のために年に数度訪れるため、外来とのかかわりがまるでないというわけではない。

その日は霧の濃い朝だった。

村の兵、いや自警団とでもいった方がいい男の集団はある小屋に集まり、額を寄せ合っている。それぞれは真剣な面持ちで、ひそひそと何かにおびえるように話をしている。

「この前、街に報告をした魔物のせいではないか？」

「ジャックが山の中に調べに行ったまま戻らん」

「殺されんじやないのか？」

「滅多なことを言うな」

「だが、それならなぜ戻らん」

声は小さいが、彼らの目は血走り、あまりの自体に冷静さを失っているかようだった。

そもそもこの小屋でそこまで声を潜める必要性などない。彼らが「何か」を過剰に恐れていることは明らかだった。

「とにかく」

集団の中で最も年配の男が床をはげしくたたき。彼は狼狽する村人を見回して、全員が自分を見たことを確認した。おそらく集団の長であろう。この人物が人をまとめることに苦悩したことが、彼の皺の深さに現れている。

「うろたえるな。街へは使いを出している。魔物の調査をしてくれる

ということも快諾された」

一座にほっとした声が漏れる。「快諾」という言葉はわざと男は使った。年輩の男はゆったりとした動きで腕を組み。鋭い眼光を湛えた瞳で一人一人の顔を見る。

「とにかくうろたえるな。魔物がおろうとおるまいと、手配通り村の周囲を固めるのじゃ。絶対に独りにならず、何かあれば助けを求めよ」

年輩の男はすでに指示を出している。彼は「何か言いたいものはあるか？」とわざと高圧的に言い、この集団の中で弱気が蔓延することを防いだ。狼狽えや混乱はたやすく伝播するのだ。

その小屋での相談はそれで終わった。彼らは濃霧の中自宅や、持ち場にもどっていく。

年配の男も外に出て息を大きく吸う。冷たい朝の空気が肺を満たす、目を凝らしてもわずか先までしか見通せないこの霧の中を歩いていく。

内心では焦りもある。だが、その表情にも仕草にもだささない。いや、出すことは許されないのでだろう。

「あとは街からの魔導士様がやってこられるまで……なんとかまとめとおかねばな」

怪鳥グリフォン。それがこの村で恐れられている魔物の名前だった。

数日前に山で採集をしていた村人が「見た」というが、それ以外の者は誰も見ていない。しかし、それから数人の集団で山に入ったものたちが帰らなかった。

グリフォンとは四肢の体に巨大な鳥の頭をした化け物である。それは本当にいるかどうかは別としても何らかの脅威が近くにいるこ

とは間違いないだろう。

年配の男はそう思いながら、歩いている。足元に死体があつた。

「……」

一瞬何が起こったかわからない。足元にできた血だまり。ずたずたに引き裂かれた体が、道端に転がっている。その服装には見覚えがあつたが、誰かはわからない。なぜなら頭がないからだ。

「……」

男は顔をあげる。まだ、夢でも見ているかのように呆けていた。あと、10秒もあれば彼は正気に戻り、持ち前の胆力で持ち直したかもしれない。

霧の中に大きな影が映る。黒い鳥のようなその影は、彼の見た最後の光景だつた。

☆

秋山は独房でパンをかじる。まずい、うまい以前に味のないパンは、しかも固い。だが彼は黙してそれを腹に詰め込んでいた。空腹で動けないほど馬鹿らしいことはない。

「ぐちそうさまでした」

両手を合わせて彼は言う。地下なのでわからないが、飯がでたということは朝なのかもしれない。彼は立ち上がり体を軽く動かしたり、腕立てをしたりする。彼自身の朝の日課である。

魔物の調査に向かうマイを待っているのであるが、彼女はまだ来ていない。

「さて、と。今日は何があるだろうか」

昨日は海に落ちて、川で猫のような耳の少女に助けられ、全然ことばのわからない世界にきて独房にいれられた。秋山はもう苦笑するほかないほど妙な状況だった。今日は魔物の調査に向かうらしい。

正直言えば任務にもどるべきという焦燥もある。だが、帰り方も分らない以上焦っても仕方がない。

「そういえば武器を支給してくれるのだったな……。武器……。もしかして槍だろうか？ 戦国時代じゃないのだけどな……。いや、そんなものかな……。刀とかないのかな」

槍を構えている自分を想像するだけで可笑しい。本心では扱ったことがないので御免蒙りたい。右腕を見れば昨日の腕輪とそこにはめられた宝石が鈍い光を放っている。

結局言葉がわかるのはあのマイという女性だけである。彼はこの世界の語学を習う必要性を感じるが、参考書があるわけでもない。

そんなことを思っていると、足音をたてて兵士の一人がこの地下の牢屋に降りてきた。彼は何かを喚きたてて秋山に言っているがやはり何を言っているのかはわからない。ただ、秋山は体を起こしてじつとその兵士を見る。

「釈放ですかね？」

問いかけてみるが兵士に通じるはずもない。

☆

牢屋を出た。1人の兵士に連れられてである。秋山はこきこきと首を鳴らしたり手のひらを閉じたり開いたりしてなまっただ体の調子を確認する。彼は手錠などは特にされなかった。マイの「調査」に同行するという話なのだからある意味当然であろう。

薄暗い地下を出ると、当然だが建物の中。先導する兵士と同じような格好をしたものがたむろしている。捕まったときに見たが作りは木造らしい、それなりの広さはあるようなので「兵営だろうな」と秋山は短く思った。兵士たちは秋山を睨んだりしてきたが、秋山はふつとむしろ笑顔を向けてやる。

外に出る。

太陽の光に秋山は目を細めた。彼が「兵営」と思った建物の周りは土壁で囲まれていた。簡易的な防衛施設だろう。そもそもこの街は城壁に囲まれているのだから、その中にある兵営にはそこまで嚴重なものはないのだろう。

兵士は彼を手で急ぐように示す。秋山は黙って従う。

朝から道には人が多い、秋山を見つけて指さしてくるものもいた。昨日の騒動を見ていたのかもしれない。

人が流れるように通り過ぎていく。知る者はいない。

秋山はその中に一人の少女を見つけようとしたが、見つからなかった。あの笑顔の素敵な猫耳の少女の顔を見れば、彼女が無事だったと安心できると思ったのだ。

そのうち石畳の道に入る。左右に連なる建物もどことなくしつかりとした造りに見えた。街の中心に向かっていているらしい。道行く人々の身なりもどことなく整っている。

「銀座の方に歩いているとおもったらいいのかな？」

兵士にわからないだろう冗談を言ってみる。兵士は後ろを振り向いて「ぎん？」と言ってから、何を言っているのだと怪訝な顔をしている。秋山は苦笑する。

石造りの建物と建物の上に青い空が伸びている。そこを一羽の鳥が横切る。道を歩きながら彼は空を見ていた。船の上でもよくこうしていた気がする。

道を曲がる、すると遠くに尖塔が見える。黒いそれは西洋の教会のようだった。どうやらそこに向かっているらしい。マイもそこにいるのだろうか。秋山は思った。

「あの鳥、なんて名前なのか、聞いてみようかな」

穏やかな声で彼はつぶやいた。

☆

教会。秋山の目にはそう映るそこに彼は足を踏み入れる。ひときわ大きな黒い尖塔とその周囲に低い塔が並ぶ。石造りの屋敷があり、秋山はそれを見上げながら歩く。

中庭は綺麗に整地されている。噴水があり、そこからあふれる透明な水が太陽の光にきらきらと輝いている。

先導兵士はある場所で止まる。秋山が見上げればあの「黒い尖塔」のある建物だった。黒塗りの両開きの扉。兵士はそこを指でさし、いけと言っているようだった。秋山はドアを開けてそこに入っていく。

重いドアを開けるとそこはまさに「教会」だった。中央に奥まで続く通り道があり、その左右に長椅子が規則正しく置かれている。正面には鏡のようなものをもった男性の像が置かれている。

中には入るとすぐにドアが閉まる。そういう仕組みなのだろう。秋山が歩きたびに床がぎしぎしと音を立てる。静かなホールにその音が響く。どことなく寒い。

「誰もいないのか？」

声が反響する。

ステンドグラスの窓の並ぶ構内。彼は歩く。

一番最前列の席に座っている者がいる。だらしなく椅子にもたれかかっている。黒い髪をしたその人影はゆらりと立ち上がる。顔に傷のある男だった。彼は秋山を眼光鋭くにらみつける。その腰には一振りの剣。

彼は片手にも何か握っている。それを秋山に対して放り投げる。秋山は片手でそれを受け取ると、目を見開いて驚く。

黒塗りの鞘に収まった一本の刀。

「かたな?……なんでこんなところに」

シャッと何かを抜く音がする。秋山が見れば、あの男が抜いた剣を方に担ぎ睨みつけてきている。その後ろにステンドグラスの光で男の顔は影になっている。その眼光だけがぎらぎらと秋山を射すくめる。

男は歩く。秋山に向かって。殺気を放ちながら。

「待て。とまれ」

秋山は何が起こっているのかわからない。そう言った次の瞬間に彼の間合いに男が飛び込んできた。横なぎの一閃。秋山は後ろに飛んでかろうじてよける。男はさらに一步踏み込んで上段から打ち下ろす。秋山はのけぞりつつもわずかな足さばきで避ける。

その首を、男が掴んだ。ぎりりと握りつぶすつもりで力を籠める。

「がつー!」

苦しむ秋山の顔面に男は剣を突こうとする。秋山は男の脇腹を蹴り飛ばし、離れる。掴まれた首を抑え、はあはあと荒い息でみれば男は緩やかに肩に剣を担いで構えをとっている。

(……戦いなれている)

なぜこんなことになっているかはわからないが先ほどの攻撃。反応していなければ串刺しにされていた。片手に握った刀を腰にひきつけ、力を込めて抜く。

銀色に光る刀身。その反りのある形、まさに「刀」だった。ただ刀身の根元に文字のような文様が入っている。

男が飛ぶ。剣を振り下ろす。秋山は身をかわす。代わりに長椅子が音を立てて2つ割れる。

秋山が腰を下げ、横に刀を薙ぐ。男は剣でそれをはじく。互いの間に火花が散る。呼吸すらもできない一瞬の間に二人の男は視線を交わす。

秋山は刀身を下げ、ゆっくりと間合いを取る。ぴりぴりとした相手の無言の気魄を感じる。二人は同時に動く、一瞬後に剣と刀がぶつかり火花が散る。秋山はそのまま相手の懐に一足で飛び込む、一閃。男の剣が宙に飛び、協会の床に刺さる。男は低く唸り、下がった。

「終わりだ……退け」

秋山も一歩下がりに言った。言葉がわからなくとも何を言っているかはわかるだろう。気が付けば汗が噴き出ている。気を抜けばこの床に転がる死体だったかもしれない。

男は軽く笑った。

急に雰囲気の変った表情で両手をあげる。まいったというところだろうか。秋山はあと息を吐いて床に落ちていた鞆に刀を納めようとして驚く。刀身を見れば刃こぼれ一つない。

「……………」

見れば刀に掘られた文様がうつすらと赤く光っている。だが、それはすぐに消えた。秋山はにらみつけるようにを見ていたが、その刀身に恐ろしい自らの表情が映って、苦笑した。

「また、魔法なんだろうか」

刀を納めてそう思った。その時またドアが開く音がした。見れば重たいドアを頑張って開けようとしている少女がいる。マイだった。

「な、なんで協会で暴れているんですか？ わ、私の管轄でものを壊したりされたら、わ、私のお給金が」

出てくるなり情けないことを言うマイ。泣きそうな顔で真つ二つになった椅子や割れた床を見ている。「ううう、なんでえ」と頭を抱えている。どうやら彼女がこの仕合を画策したわけではないようだった。

マイはとことこと秋山の前に立つと、むすっとした顔でジトつと見ている。

「あー。えーと、すみません」

「すみませんではありません。傭兵隊長となんで喧嘩しているんですか」

「傭兵隊長……？ ああ、そうなんですわね」

「そうなんですわねって……はあ、あの方はヘクター」

目であの男を見るマイ。名前をヘクターと言うらしい。彼は剣を納め椅子にだらしなく座っている。自分を見られているとわかると手を挙げて反応した。

マイは彼にも抗議している。マイの言葉が秋山にはわかるが、ヘクターの言葉はわからない。彼女はむむむと顔を赤くしているようだった。

「あの男は貴方の力が見たかったそうです。まあ、合格だそうです、あーもー、そんなの表でやってくださいよ。こ、今月もきついのに」
場合によっては殺すつもりだったみたいだが、と秋山は内心で思う。マイはそこまでとは思っていないだろう。彼女はこめかみに手をあてて、唸っている。ヘクターに弁償させられない事情でもあるのであろうか。

「アキヤマさん」

「あ、はい」

「早速ですが、もう少しで出発しますよ。ヘクターさん、あなたもいいですね!」

ヘクターに対しては語気が強い。彼は頭を掻きながら立ち上がり、協会から出ていった。マイはその後ろ姿を見ながらため息をはいている。彼女は秋山を振り返る。

「ああ、その武器。どうですか？ 使えそうですか？」

「そうですね手になじみます……なんで刀があるんですか？」

「かたな……刀というんですね。それ」

「え？」

「神託通りにつくったそ……。いやえっと。私は渡すように言われただけですから」

「渡すように？ 誰にですか？」

マイは少し目をそらして。

「上司ですよ」

と短く答えた。彼女にも隠し事はあるらしい。秋山はそれ以上追

及することはない。いずれ聞けるときもあるかもしれない。いや、聞き出すにしろ今ではないだろう。

マイは「ちよつと待つててください」と言うと、教会の中央を歩き、安置された鏡を持った男の像の前に行く。

跪いて祈りを捧げるその姿は、ただ素朴に絵になると秋山は思った。

ただ、当たり前前のように

教会の広場には馬車があった。いわゆる箱馬車というものだ。天蓋があり、両側に窓がついている。入り口は片側にしかない。

4輪の馬車を体格のいい2頭の馬が繋がれている。2頭とも栗色のよい毛並みであった。秋山は海軍兵学校時代に乗馬を習得している。海軍にはいつてから殆ど乗ることはないが、秋山は栗色の眼の綺麗な馬に近づいて撫でてやる。

「大きいな。こちらでも馬は同じなのか」

整った毛並みは手触りがいい。よく手入れをされているようだ。秋山は手を放した。

彼は腰に吊った刀を拵んで。振り向く。なんとなく慣れない。黒塗りの鞆に収まったそれは、腰に巻いたベルトに固定されている。このベルトはマイにもらったものだった。

マイもやってくる。後ろには教会で秋山に切りかかってきた男へクターがいた。傭兵の隊長らしいが、秋山の実力を確かめるために切りかかってきたという、自分を殺すつもりだったと秋山は思うが、同時にあまり憎しみだとかの負の感情がわからない自分に苦笑した。

「まあ、いろいろとあったからか」

青い空を見る。数秒目を閉じる。こうするだけでいつも思い出ししてしまうのだった。彼の国は大きな戦争の最中にある。剣や槍の闘争ではあまりないのかもしれないが、近代兵器の中での戦場は目を閉じて開けた刹那の時間に目の前に「部下だったもの」が転がっていることは幾度かあった。

秋山が目を開ける。

可愛らしい顔が目のある。マイが目の前で不思議そうな顔をしている。

「何をしているんですか」

「い、いえ……、別に。……ありがとうございます」

「は？　なんでお礼を言うんですか?？」

わからないという風に首をひねるマイ。秋山も自分の口からそんな言葉が出てきたことに驚いているが、別段不思議ではない。ただ、彼女が声をかけてくれただけで「あの光景」を思い出さなかったことを感謝したのだろう。秋山は苦笑する。

自分のことなのにどこことなく客観的である。

ヘクターは後ろで肩をすくめていている。何を想像しているかはわからないが、話しても言葉はわからない。秋山は一瞥して薄く笑いかける。ヘクターも同じような表情をした。互いに冷たさを伴った笑みではあつた。

「それじゃあ、秋山さんは馬車に乗ってくださいね。私と同行してもらいます。ヘクターは傭兵団を連れて街の入り口で待機しておいてください」

ヘクターはそれを聞くと手をあげてどこかに行ってしまった。秋山とマイの腕輪がほのかに光っている。マイは普通に秋山と異なる言語を話しているのだろうが、彼には母国語のように聞こえる。

秋山が馬車に乗り込むと向かい合わせに座れるようになっていた。そこにはすでに先客が一人いる。

桃色の髪をした女性だった。赤い文様をほほに刻み、黒いドレスのようなものをまとっている。整った顔立ちで両手を組んでいる。どこことなく冷たさを感じさせる表情だったが、秋山をみると、

「あ、こんにちは、座りなよ」

気さくに話しかけてきた。秋山が何かを言う前に彼女は腕に付けたリングを指さしてにまーと笑う。秋山は軽く頭を下げて乗り込んだ。続いてマイも乗るが、先に乗っていた女性には特に反応しなかった。

「君が、そうなのか」

なにがそうなのか秋山にはわからないが、女性は言った。手を顎につけて値踏みするように秋山を見る。彼はどう反応すればいいのかわからない、マイはそんな秋山を不思議そうに見ている。

「どうしたんですか？ アキヤマさん」

「え？ いえ。女性とぐ」一緒と言うのは少し緊張しますね」

「……そ、そーですか……」

少し赤くなつてマイは横を向く。その様子を隣にいる女性はニマニマ見ている。

「かわいいね。この子」

秋山は答えず愛想笑いをする。容姿について云々するのは良いことではない。

馬車が動く。秋山の後ろで人の乗る気配がした、おそらく御者だろう。ぱちんと鞭の音がして馬車の車輪がからからと音をたてて動き出す。

窓の外にはゆっくりと景色が流れていく。教会の尖塔は連れてこられた時はあまり感じなかったが、黒い見事な造りで天に伸びるその姿は美しい。

秋山は外を見ながら街並みを見ている。大勢の人が行きかう。歩く目線と馬車からの目線は少し違う。そんな彼の姿を桃色の髪的女性はじつとみている。

「アキヤマっていうの。君」

「はい、秋山周作と言います」

「へー、そう。これからどこに行くかこの子に聞いた？」

女性はマイを親指で指す。マイは困惑したような顔をしている。

「ええ、とある村にグリフォンとかいう化け物を探しにいくとか」

「探しに！ そりゃあいいわ。あの魔物はなかなか手ごわいと思うけど、まあ、この世界の肩慣らしにはいいかもしれないわね、あーそうだ、死んでも安心していいわよ」

「……………」

からからと馬車は進む。マイは「え？ え？」と呟いて秋山を見ている。女性は腕を組んで足も組む。スカートのスリットから太ももが見える。秋山は「はしたないですよ」と一言言うと、マイが「え?！」と反応する。マイに言ったのではない。

女性は言う。

「さて、君は別の世界から召還されたということは知っている?」

「……別の世界?」

「そ、ここではないどこか。あ、どこかかっていってもあなたのいた世界のことよ。たしかー、日本だっけ？」

「……ええ」

「君、探るようなかおをするとか数が少なくなるね。それとも元からかな？ いいよ。私で避ければいくらでも話をしてあげるわ。あなたがこの世界に召喚された目的はただひとつ『魔王アスモデウス・ヴェルス』を打倒させるため」

言っていることはわかる。ただ意味が分からない。率直に秋山は思う。自分は「魔王とやらを斃すために召喚」されたらしい。言葉の上では理解できる。

「魔王アスモデウスとは何者なのですか？」

「えええ？」

マイが驚く。

「な、なんで魔王の名前を知っているんですか」

女性が続ける。

「そりゃあ今私が言ったからよねー、周作君。この子ほんと可愛いわ。でもねー。この子は

いくつか隠し事をしているわ」

下町を馬車が通る。子供が追いかけてきてころぶ、そんなのどかな光景が窓の外にある。その中に女性はゆつくりと微笑む。マイの真横で何を言っているのだろうか秋山は思う、いや警戒する。

「何者か？ っっていわれるとなんだらうね。魔王というのは人間側の呼称だからね、あるとき何かのきっかけで特殊な力なんか目覚めてしまった人間がそう呼ばれていることがおおいわね」

「……特殊な力。目覚めて……。ではその魔王というのは人間なのですか」

「まあ、もとはね。……でもね哀れな奴よ。不死の力に目覚めてしまつて死ねないだけの」

「不死の力？」

その言葉にマイが立ち上がった。その顔は驚愕に染まっている。馬車は路地裏に入っていく。

「なんなんですか?! さつきから!! 誰と話をしているんですか??
ま、魔王の力をなんで知っているんですか?? ま、魔術師でも一部しか知らないはずなのに!!」

秋山はその言葉で理解する。このにまあと笑っている女性は、化生の者だと。刀を掴み、居合のできる姿勢をゆつくりと、焦らずにとる。そこで気が付いた。

「まあ、この狭い空間で刀なんて振り回したら、このかわいい子もケガしちゃうわね」

女性は立ち上がる。秋山を見下ろして、言う。彼女の唇がゆつくりと動く。

「私の名前はアスモデウス・ヴェルス」

女性の口元が嬉し気にゆがむ。赤い、赤い口が開く。

「秋山周作君、これからあなたの前に何度か遊びに来るかもしれないけど、仲良くしましょう? 互いに殺しあう関係性なんだから」

心底楽しそうな顔で彼女は言った。秋山は「この場は見逃していただけのですか?」という。アスモデウスは張り付けた笑顔のまま、「もちろんよ。というか、私はここにおいて、ここにはいないわ。殺す方法もない。でも、覚えておきなさい周作君。いや、知っているかしら、人間の欲望や願望は一つではないということだね……」

その瞬間一筋の矢が車内に飛び込んできた。窓ガラスを割り、秋山の前をかすめて飛んでいく。マイは「わ、わああ!」としりもちをついた。秋山は身をかがめる。彼が見上げるとそこにはすでに桃色の髪の女性はいない。

ただ、窓の向こうには黒ずくめの者が数名こちらに向かってきている。手には剣を握っていた。秋山は息を吐く。突然の敵襲の時彼はこのジnkスを自らに作っている。息を吐く、それだけで心を整える。

マイは混乱して何が起こったかわからない顔をしている。無理もないだろう。

「マイさん。誰かはわかりませんが敵です」

刀を抜く。秋山は自分の冷静さが、滑稽にすら思えた。

闘争の形

秋山は刹那に目を閉じる。思考は一瞬で終わる。目を開けた時、彼の目には強い光があった。

魔王との邂逅で得たあらゆる情報は今は思考の外に追いやる。彼は困惑しているマイの手を握る。ずいど顔を近づけて聞く。

「マイさん」

「え？ な、なにが起こって」

「マイさん!!」

「は、はいー!」

意識を自分に向かせる。マイの手をぎゅつと握って、息がかかるくらい近くで声をかける。時間が惜しい。

「いいですか？ 今から逃げます。この場は私に、いや俺に任せてください」

マイは一瞬呆然とした顔をして、それからこくりこくりと何度も頷く。

秋山は彼女の手を握ったまま目線を動かす。外には近づく「敵」。人数は3人。先頭の1人は剣を握っている、後ろにいる小柄な者は湾曲した短い双剣を持っている。後方で弓を構えている者もいる。

細かく、そして迅速に頭に情報を書き入れる。御者の気配がしない。逃げたか、もしくは「敵」だったのだろう。

「……」

秋山の思考は進む。この場から逃げるにはどうするのか。武器は刀のみ。彼の脳内にマイを戦闘させる思考は元から存在しない。

息を吐く。

彼はマイを見る。ただ彼女は秋山の横顔を見ていたのだろう、秋山に見られた瞬間に驚いたように目を見開く。秋山はその彼女に短く、そして的確に声を出す。

「俺が外に出て敵を引きつけます。その間にマイさん」

耳元でささやく。マイはただ頷くしかできない。秋山は「わかりましたか?」と言って、一度マイの返事を聞いて、彼女の手を放す。

馬車のドアを蹴飛ばして開ける。秋山は飛び出した瞬間に身をかがめて、奔りだす。一瞬遅れて矢が彼の傍をかすめる。びいんと馬車に突き立った。

秋山は刀を手に走る。

剣を持つのは黒づくめの「男」。彼は数歩先で足を止める。

「ダ ヴァス」

何かを口走る。その瞬間彼は右手を虚空に掲げ、その周りに赤い紋章が浮かび上がる。幾何学上のそれは美しく、紅く拡がる。

秋山はその危機を感じる。何が起きているかはわからない。だが、彼は手に持った刀を男に投げつけた。

「!!」

男が身をよける。抜き身の刀は避けるかはじくしかない。だが、その一瞬に距離を詰めた秋山は彼を蹴り飛ばす。

「ぐ」

くぐもった声漏らしながら。彼は手を伸ばす。紋章がさらに広がり、焰となつて秋山に襲い掛かった。体はひるんでも、心はそのぎらついた目のようにひるまない。

「!!」

刹那。秋山は、焰の中に飛び込む。男との距離は近い。彼の手から打ち出された焰は秋山の服をわずかに焦がす。男は驚愕した顔で、剣をふるう。彼も冷静だった。

秋山は腰の鞘を抜いていた。

剣が届く前に、その喉元に鞘で突きを打ち込む。男は何か悲鳴をあげながら後方に飛ぶ。喉への一撃はそう簡単に回復はしない。

だからこそ、次である。

双剣の「少女」がとびかかってきた。秋山は腰を落として躲す。そしてすぐに走り出す。後方には弓を持った者もいるのだ。秋山の眼は側面を狙う、弓使いもとらえている。

「はあー」

双剣の少女が叫ぶ。瞬間体から青い光がほとばしる。秋山の視界

から少女が消えた。だんつと何かを蹴った音だけが耳に届く。

秋山は迷わない。視界から消えたなら、視界の外に彼女はいる。彼は前に躲す。わずかな差で彼が元居た場所に斬撃が飛ぶ。わずかでも迷っていれば首が飛んでいただろう、だが、驚異的な身体能力だった。

秋山は壁を背に走る。矢が壁に突き刺さる。一瞬でも止まるわけにはいかない。だが、双剣の少女が目の前にいた。腰を落とし、剣を構えている。秋山は一瞬、死を想う。

「ダ ヴあす!!」

「!!」

とつさに叫んだ言葉に少女は驚いて避ける。単なるはったりである。どういう構造かはわからないが、焰を生み出せる魔術をこれで発動できるのだろう。

姿勢を崩した少女の足元を蹴る。グラついた胸元を掴んで投げ飛ばす。手加減している余裕はない。柔術での投げ、単なる技術である。

「アキヤマさん!」

声が視界の向こうで聞こえる。マイの声。

秋山は先ほど投げた刀に向かつて走る。弓を構えた者が直線にいる。ここで向き合わなければマイを狙うかもしれない。弓使いの目が光る。引き絞られた短弓から矢が発射される。

「ぐっ」

腰をひねってよける。足元を狙われた。太ももをかすめる。

動きを止めて仕留めようというのだろう。だが、この弓使いは驚異的な腕と言うわけではない。もしも、そうであるならば今頃秋山は死んでいるだろう。

秋山は刀を拾う。走りながらである。

弓使いは矢をつがえる。その一瞬に秋山は全力で踏み込んだ。

一閃。

弓が2つになって地に落ちる。ぽたぽたと腕から血を流して弓使いは悲鳴を上げた。

殺気。

秋山は地面に映った双剣の少女の影を見る。上空からの攻撃。手には刀。秋山は裂帛の気合を込めて、後方に斬撃を繰り出す。がきんと双剣と刀がぶつかる。火花が散る。少女は後方に飛び。秋山も腕に強烈なしびれを覚えつつ、下がる。

刀は鞘に納め秋山はマイのもとに走る。マイはあの栗色の馬の傍にいた。秋山はその馬に飛び乗ると、マイを引つ張り上げる。痛かったのかもしれない、マイは「きや」と言う。

栗色の馬はすでに馬車からは離されている。

『マイさん。俺が敵を引きつけます。その間に前の馬の留め具を外してください』

栗色の馬がひひんと叫ぶ。もう一頭もいるが、もはやかまっている暇はない。

秋山は馬上でマイを抱きかかえると手綱を引いて、駆けだす。

街中を疾駆する。前にはマイのうなじがある。

「に、逃げられたんですか？」

「わかりません」

街中を騎乗で疾駆する。住民は一樣に驚いた顔をして脇に逃げる。石造りの家が並んでいる。

その屋根伝いを双剣の少女が並走してくる。馬と同じ速度で彼女は奔っている。秋山のいまだ腕にはしびれがある。馬上で抜刀しての戦いは流星にしたことがない。

手綱を握りしめる。秋山は腿を締め、馬を操る。石畳みを蹄が鳴らす。

双剣の少女の周りに青い光がほとぼしる。彼女の速度は上がり、家の屋根ではなく、壁を走り始める。

「化け物か……」

流星に秋山は漏らす。双剣は壁を伝い、秋山に切りかかる。彼はマイの体に覆いかぶさり、かぼう。背中に焼けるような痛み。秋山はうめき声すら漏らさずに歯を食いしばる。

「あ、あきやまさん」

「大丈夫です」

血まみれの背中はマイからは見えない。それはよかつたと秋山は思う。

双剣は一度地面に降りて、ゆらりと走り去ろうとする秋山たちを見る。黒いローブから半分だけ見えた赤い瞳。

青い光が彼女を包む。右足に力を入れて、疾走する。彼女の蹴りだした石畳にはその足跡がそのまま残っている。すさまじい力で蹴りだしたのだ。

街の間を馬が走る。そのすぐ後ろを少女が追う。

秋山の血が飛ぶ。道行く人の悲鳴、喧噪の間を駆け抜ける。秋山はこの瞬間にも最善を希求する。その前には泣きそうな顔をしているマイがいる。彼女は、唇を噛んで怖さを抑え込むと、叫んだ。

「……アキヤマさん！ あの、あの出口を目指してください！」

城壁の一角を指さす。そこに街の出口があるのだろう。そうすることに何の意味があるかはわからない。だが、秋山はそちらに向かつて馬を走らせる。

猛然と双剣の少女が追う。手には血の付いた湾曲した双剣を握つて。マイは振り向く。

冷然とした顔の少女と目が合う。マイは恐怖を覚えたが、だが短く数節の言葉を発した後に叫んだ。

「ラ バウス」

青い美しい文様がマイの左手を包む。彼女はその手を双剣に向ける。

双剣は片方の短剣を投げる。

「え？」

マイに剣が迫る。その剣を秋山が――

「だああー」

手で撃ち落とす。腕から血が飛ぶ。

マイはその瞬間に追ってくる少女を睨みつけて手を開く。冷気が氷のつららを生み出し、打ち出される。少女は体をよけたが、次の瞬間には自らの足元が凍っていることに気が付く。

「！」

時間を稼げた。マイは息を吐く。だが、足元の氷砕いて、少女は追ってくる。マイはその間に右手を掲げて数節唱える。そして叫んだ。

「ダ ヴァース！」

右手に赤い文様が広がり、彼女は手を空に掲げる。文様は焰となり空に打ち出された。

空に上がった焰は一度炸裂して、消えた。

秋山と彼女を載せた馬は荒い息のまま走る。入るときに見えた市場を疾駆する。

「どいてくれ!!」

人ごみが両側に分かれる。騒動を聞いていたのか、市場の者たちは逃げつつも野次馬のようになっていく。だが、追跡者である少女は容赦なく追ってくる。

腕から血が流れる。秋山はそんなことにかまってはられない。街の出口が見える。そこに何十人が集団がいる。

その中から離れて道の真ん中にぎつと、佇む短い金髪の女性。小柄だが耳の長い奇妙な女性だった。

顔に文様を刻み、弓を持つ。

背にした矢筒から矢を抜きつがえる。ゆつくりとかまえている。

マイは叫ぶ

「た、助けてくださいー！」

金髪は何か言う。にかつとわらって。矢を打ち出す。

その矢は一直線に秋山たちの側面を抜けて、双剣の少女に向かう。彼女は手に持った剣で撃ち落とす。真つ二つになった矢が地面に落ちる。

金髪はあれ、と言う顔で首をひねる。その後ろから剣を肩に担いで出てきた男は、ヘクターだった。秋山は馬を止める。

ヘクターの後ろには屈強な男たちが並んでいる。彼は、双剣に向けて何かを叫んでいる。秋山には言葉の意味が分からないがおそらくは退くように要求しているのだろう。

双剣はしばらく黙っていたが、踵を返し疾風のように走り去った。
秋山はただ黙ってその後ろ姿を見ている。何者かわからない彼女
を。

グリフオンの脅威

敷かれたゴザの上に秋山は腰を下ろす。

城門の前は広場になっている。有事の際などには軍隊を移動させやすいためだろうか、と軍人らしく秋山は考察した。それはただの癖と言っただけ、特に意味があるわけではない。

開けた視界は襲撃の対応がしやすい。先ほどの騒動を見ていた野次馬が遠巻きに見ているが、近寄ろうとするものはほとんどいない。

黒づくめの者たちの襲撃を撃退した後、傭兵団とともに待機している。背中と腕の傷に関してはさきと痛むが、声や態度には出さない。

「アキヤマさん」

彼の後ろにマイが座る。彼女の声は背中越しに聴いているからその表情はわからない。

「それじゃあ、傷を見せてください」

なんとも泣きそうな声でそういう。秋山は自分の傷を見てそうなったことを思えば、申し訳ない気持ちもあり。それでいて彼女の本質が分かった気がする。

着ているシャツを脱ぐと、秋山の鍛えられた体とその背中に刻まれた赤い刀傷が露になる。どろりとシャツについた血が下に落ちる。その彼の体には今回のことは関係のない傷がいくつもある。腹部には一度抉れたのだろうか、大きな銃創がある。

「う」

何かを抑えたマイ声。振り向かず秋山思う。マイに悲しんでもらう気はない。

「おなかがすきましたね」

「……………はい？」

「いや、いい運動をしたからお腹が減ったなど」

「……………何を言っているんですか？」

失敗したかな？ と秋山は苦笑した。普段は軽口などは殆ど叩く暇はないから慣れてはいない。慣れないことをするものではないな、

と内心で少し反省する。マイは両手を彼の背中に当たるか、当たらないかの位置にかざして数節の呪文を唱える。

「ファイ リーア」

暖かな感触が背中を包む。あたりを優しい翠色の光に照らされる。痛みが引いていく。これは治癒の魔法なのだろうと秋山は心地よさの中で感じる。

(外科的な技術はなくてもこのような魔法がある……いいな)

心底羨ましく思う。もしも、この力が自らの国にもあれば大勢を援けることができたのだろう。しかし、それを声に出すわけでもない。

「わ、私はですね」

マイが背中越しに話しかけてる。

「パンを焼くのは、その、自信があるんですよ」

もう一度秋山は苦笑する。自分の言った戯言に彼女は合わせてくれているのだろう。秋山は「そうですか」と返す。優しい光の中で二人はどうでもいい会話をしている。

「きよ、今日は無理ですけど、今度焼いてあげますよ」

今お腹が減っているというのに、今度という。どうやらマイもこのような会話は不得手らしい。だが、秋山は、

「そうですか。それは楽しみにしておきます」

と言った。それからお互いに無言ではあっても特に居心地の悪さを秋山は感じなかった。だからこそ、その無言の内に落ち着いた冷徹に考えてしまう。

(襲撃してきた彼らは何者だったのか、きっと俺にはそれはわからないだろう。だが、本気ではなかったな)

襲撃者本人達はおそらく全力で秋山たちを抹殺に来た。だが、わずか3名である。路地裏まで誘い込みつつ少人数での襲撃は片手落ちである。秋山は自分なら側道すべてに待ち伏せをさせて逃がさずに殺す計画を立てると思う。

「マイさん。あの襲撃者達は、何者なんでしょうね」

「え？ あ、ど、どうなんでしょうね。……正直見当もつきません」

見当もつかないとまでしか答えられないのだろうか、それとも本当

にわからないのだろうか。秋山は自然に浮かんだ疑念と疑いの心を恥じつつも吟味する。あの魔王との会話が「

本当であれば」マイは全てを自分に伝えてはいないということになる。そもそもあの3人が秋山を殺しに来たのか、マイを殺しに来たのかわからない。

「終わりました!」

すつと背中が軽くなった気がする。秋山は首を動かして肩を回す。

「すごいな、本当に治ったんですか?」

「次は腕です。早く出してください!」

なぜか治療をした本人であるマイが喜んでいる。秋山が振り返ると、そこにはうれしそうな顔をした無邪気そのものな少女がいた。秋山は彼女を疑う自分に少し嫌気がさす。

「いやだなあ」

「え? な、何ですか?」

「あ、いや、今のは独り言ですよ。マイさん」

続けて腕の治療も終わるとそこに黒い鎧を着た剣士がやってきた、ヘクターである。彼はマイに対して何か話をしている。何かの報告らしいが言葉はやはり秋山にはわからない。ただ、深刻そうな顔でヘクターもマイも話し込んでいる。

ただ、ヘクターが最後ににやついて何かを言うと、マイが

「ちがいます! 私はそのつもりじゃないです」

と顔を赤くしてむきになって反論している。ヘクターはにやにやと秋山を見ている。何を言っているのかはだいたい察しが付くが、あえて冷静に聞いた。

「どうしたんですか?」

「むっ」

むーと秋山を見てからマイはこほんと咳払いして、ひどく落ち着きはらった表情で向き合った。秋山が笑ってしまいそうになるほど作った態度である。

「今の治療中に傭兵の何人かに教会へ手紙を持たせて走らせました……正直訳の分からない襲撃を受けてこのグリフォンの調査を行う

べきかと……結果は調査を続行です。これから、その申し訳ありませんが出発せざるを得ません」

「そうですか」

組織の事情というものがあるのだろう。自らの所属する組織を元にそう考えた秋山は理不尽を多分に含んだ命令も素直に聞いた。ただ、あまりに判断が早いということも同時に引つかかる。

目を閉じて考えるが、今ある情報だけでは憶測しかすることはできない。

(そもそもが、マイさんが偶然俺をグリフォンなどという魔物の調査に同行させようとするのもおかしさはある。ある種の手際の良さを感ずる)

目を開けると目の前に金髪の少女がいた。

「……」

黙って驚く秋山。一言でも声をあげればいいのだが、これも癖だろう。

金髪の少女は耳が長い。先ほど追ってくる「双剣」から弓を使って助けてくれたのは彼女だったと秋山は思い出した。緑のローブで身を隠して、手袋をつけた手を顎にやりまじまじと秋山を見ている。

ローブの隙間から白い太ももが見える、短いショートパンツをはいているのだろう。秋山はそれで目を背ける。女性の肌など見るものではない。

「わーすわーす」

金髪の少女は何か言う。

「わーす」

「……マイさん。なんとされているのでしょうか？」

言われてマイはぎよつとした顔で目を泳がせる。金髪の少女は手を口元にあてて「ぶぶ」と笑っている。彼女は立ち上がって「わーす」と言って走り去っていく。何だったのかわからないが秋山はからかわれたのだろうと思った。

「あの、あれは、ばーかばーかって言っているんですよ」

「ああ、そういう」

冷静に受け流す秋山。異国語で馬鹿にされることはよくある。

「それにしてもあんな女の子が傭兵ですか。まだ子供なのに」

「まだ子供……？ 小柄ですが私より上の彼女は19歳ですよ。……まあ、数百年を生きるエルフからすれば子供ですけど」

秋山は今のわずかな言葉にいろいろと混乱した。聞きなれない単語がいくつかあることもそうだが、あの少女は19歳でマイはそれよりも年下だという。それこそ子供ではないか。

「……マイさん。失礼ながらいくつですか？」

「私ですか。去年魔法学校の学位を得たので16ですね。あ、もうすぐ17です」

「じゅう、ろく」

めまいがする。こんな年端も行かぬ少女を疑っている自分にである。背中を切り裂かれたことやこの世界に来たことよりも秋山は無駄に大きな衝撃を受けていた。彼の精神構造は理不尽は受け流せるが、弱い者とされるものに対してはひどく繊細である。

「ま、まあ、我が国でも江戸時代では15歳で元服を迎えていましたし」

「ゲンブクって何ですか？」

秋山はじつとマイを見る。なんとなくどこことなく「子供っぽさ」があると思っていたが、そうではなく「大人っぽさ」のある子どもなのだと認識した。そう考えると危険なことをさせているこの世界の大人と彼女の境遇に怒りとともに守るべきという義務感が沸き上がるのを感じた。

「マイさん。あなたのことは俺が守りますよ」

「え？」

突然の申し出にマイは混乱して顔を赤くした。意味が分からない。

☆

城塞都市を出ると来るときに見た麦畑が広がっている。

秋山は馬にマイを載せて自らは徒歩でその手綱を引く。その後ろにヘクターを中心とした傭兵団が続いていく。彼らは20名にも満たない数のしかないが、それぞれバラバラの武器を手に行っている。

正式な軍隊のように隊列を組んでいるというよりは同じ方向に歩いているという風情である。

その中にあの金髪のエルフもいる。名前をエールというと秋山はマイに聞いた。

エルフという種族は森の奥に住んでおり、あまり他の種族とかかわりを持たないという耳が長く総じて聡明で、人間に比べて長い時間を生きるという。そんな高貴な種族に生まれたエールは今両手を頭の上で組んで、おおきなあくびをしている。

マイは馬上で地図と睨んでいる。

そよ風が拭いている。黄金の麦畑がさあと音を立てる。その中を彼らはいく。

先頭を行くのは異世界人である秋山という奇妙な状況になっている。彼は破けたシャツを脱いで傭兵団から貸してもらった肌着とその上に革の鎧を着ていた。鎧と言っても簡易的なものである。思ったよりは軽い。

その腰には刀を佩いている。結局あの襲撃者達との戦闘を経ても刃こぼれ一つしなかった。

一本道が続く。街道なのだろう。道行く人達の中には最初に合った猫耳の少女のように動物の耳のある者たち、馬車、武装をしている者たちと様々にいた。

その中で秋山は流れるときが緩やかな、そんな錯覚に陥りそうになった。遠くを見れば山々の稜線が伸び、白い雲がゆっくりと流れていく。

そんな中で彼の背中をバンと叩く者がいる。

「！」

見ればエールがいた。おそらく暇なのだろう。彼女は手に何かパンのようなものを持っている。細くて堅そうだった。彼女はそれを自分で噛んで、もぐもぐと食べる。

それから秋山にずいと渡した。食べかけである。おそらく毒見をして見せたのだろうが、秋山は年頃の彼女にはしたくない真似をしないようにと言いたかったが、言葉がわからない。結局善意からだろうと

受け取って食べた。

「まっ—」

マイが妙な声をあげた。秋山はそれよりもパンの味気無さに驚く。エールは腰からもう一つ同じパンを出して、さらに竹筒のようなものも出した。それを傾けるととろりとほちみつがでてきて、彼女は美味しそうに、見せつけるように食べる。

秋山は苦笑する。これがやりたかったのだろう。

そんな緩やかな道程。麦畑を超えると小川の流れる小さな橋を渡り、森の中に入る。そこにもちゃんと道路がある。年貢やその他の貢納のために整備された道であるが、秋山にはそんなことはわからない。

黄色に色づいた落ち葉がひらひらと舞う。秋山の足元でくしゃくしゃと音が鳴る。エールもその後ろでわざとらしく音を鳴らしながら歩いている。彼女は何が楽しいのか秋山の真後ろについてはわからない。たまに話しかけてくるが、何を言っているのかさっぱりわからない。

マイに通訳を頼もうにも、なぜか少し不機嫌そうであるから秋山はやめておいた。

鳥が鳴いている。まるでホトトギスに似ているその声に不意に秋山は故郷を想ってしまうが、首を振った。

「マイさん。あとどれくらいでその調査場所にはつきそうなのか」

「ああ、えっとそうですね」

彼女は地図を見ている。案内役でもつけければいいのだろうが魔物の調査という危険任務に参加させなかつたのだろうか、秋山は思う。

「この道をまっすぐでつくはずですが。山間の村ですが」

そう言うつてからさらに歩いても一向につかない。マイは馬上で「あれ？あれ？」と地図をみている。後ろの傭兵団はそれぞれ談笑してついでくるからあまり気にしてないようではある。傭兵をしているからには行軍自体には慣れているのかもしれない。

ただ、秋山の後ろの少女、エールだけは明らかに不機嫌そうである。

秋山は彼女に何か話しかけてやろうとしたが、やはりどうしようもない。やはり言葉を習得しなければかなり不便である。

「マイさん」

「はい……」

元気のない声はだんだんと自信を失っているのだろう。

「私に言葉を教えてくれませんか？　簡単なことからいいんです」

「言葉を教えてくださいですか？」

馬上のマイとの会話をエールが聞いていた。彼女は秋山の背中をぱんとたたいて、指で自分をさしている。暇つぶしをみつけた、と言う顔でうれしそうである。彼女はぱたぱたと前に走って行き、石を拾う。

「グイ」

という、おそらくは石のことを「グイ」と言うのだろう。秋山がマイに目で問うと、彼女もこくりと頷いた。

それからエールは葉っぱや弓、服、ローブ、馬と見えるすべてにたつと走ってはその名詞を叫ぶ。単語の羅列だが秋山にはありがたいことだった。彼は元々いくつかの異国語を話すことができる。頭の中で整理することには慣れていた。

イチヨウのような、そんな落ち葉の上をエールは楽しそうに走りまわる。ヘクターはたまに彼女に声をかけるが、彼女自身は意に介していなという様子だった。

そうこうしているうちに木々の間を抜け村山の中にいくつかの民家が見えてきた。

簡易的な柵で囲まれている。その小さな集落には遠くから見ると人影がちらほらと見える。すでに日は傾きつつあった。夕暮れの闇がだんだんと深くなってきている。

「あーつきましたね」

マイはほっと安堵のため息をもらした。傭兵団もそれぞれが喜んでるようだ。

村への道を行くと秋山はふと、気になるものを見つけた。それは「なに」というものではない。いうなればシミのようなものだろうか。

地面に赤い、シミのようなものがうつすらとある。

彼は膝について調べてみるが血の跡のように見えた。

「これは、グリフォンと言う化け物にやられたのか……?」

少なくとも死体があるわけでもない。遠くに見れば村人らしき人影が特に警戒した様子もなく働いているようだった。秋山は立ち上がり、歩き出す。

村の入り口は不自然に壊れていた。アーチ状の入り口があったのだろうが崩れている。マイたちとそこをくぐると村人たちが遠巻きにこちらを見ていた。

マイは馬を降りて彼らに言う。

「私はファロム公国所属の魔導士マイ・トランスヴァールです。依頼を受け魔物も調査に参りました。責任者にお会いしたいのですが、けほ。案内いただけませんか」

大声を出してせき込むマイ。秋山はらしいな、と勝手に納得する。村人たちはそれぞれひそひそと話し合い。何人かがどこかに走り去っていく。

(何か妙だな、もともと魔物の調査を依頼したのはこの村なんだろうが……それにしても)

秋山は直感に近い疑義を感じる。随分と態度がよそよそしい。

そんな彼の疑問をよそに暫くすると年配の男が杖を片手にやってきた、彼は数日前に村人を集めて魔物の調査依頼をしたものである。周りには数名の男たちがいる。彼らはマイの前で頭をさげ、口上を述べている。

マイはひどく驚いている。

「え? 魔物の、調査とはなんのことと言うのはど、どういうことですか?」

困惑しているのは年配のおそらく村長も同じだった。お互いに話がかみ合っていない様子だった。

日が、沈んでいく。村人たちが集まってくる。秋山の後ろにヘクターがやってきた、彼は秋山の肩を掴んだ。何かを異様なものを感じているのだろう。エールも自らのローブについたフードを被り、弓を

掴んでいる。

マイは村長に困惑したままに言う。

「だ、だってグリフォンが出たから、調査をと依頼をしたはずではないですか」

「グリフォン？」

村長が言う。

「グリフォン」

周りが声をあわせる。

「グリフォン」「グリフォン」「グリフォン」「グリフォン」「グリフォン」
「グリフォン」「グリフォン」「グリフォン」「グリフォン」「グリフォン」
「グリフォン」「グリフォン」「グリフォン」「グリフォン」

マイがあとじさる、周りすべての村人が同じ言葉をただ呟き続けている。この異様な光景にマイは秋山の元まで下がってきた。

「な、なんなの」

秋山が彼女を後ろに下げる。ヘクターがその背中を守るように動く。

その時、大きな羽ばたきの音が響く。その音に秋山は空を見る。

夕日を背に巨大な怪鳥。いや、鷲の頭と獅子の体をした化け物が彼らを見下ろしている。

「グリフォン……」

刀を掴む。秋山の動きに合わせて、グリフォンが吠える。空気が揺れ、山々を震わせるほどの咆哮。ぴりぴりとした殺気が秋山の体をなでる。

「ぐぎゃ」

後ろで悲鳴がする。見れば村人が傭兵の一人を「刺している」。すぐに周りの仲間がその村人を打倒した。見れば周りの村人たちの手には粗末な武器、包丁や鍬などが握られている。あるものは木の棒を握っている。

ただ目だけは異様に赤い。じりじりと近づいてくる。口々に「グリフォン」と言いながら。

「魔王」の顔が秋山の脳裏に浮かぶ。

グリフォンがもう一度吠えた。その瞬間村人たちが一斉にとびかかってくる。

絶望の空

狂人、としか言いようのない者たちがじりじりと近づいてくる。その目は赤く光、口々に「グリフォン」と繰り返し呟ている。彼らの手には鍬や鋤、それでなければ包丁や棒といった武器と言うには粗末なもの握られている。

ただ、それらを握りしめる手は強い力が込められている。

秋山は困惑するマイを片手で制しながら、後ろに下がろうとする。彼の後ろでは怒号と悲鳴が響いている。傭兵の一部はすでに戦闘に入っているのだろうか、秋山は迫りくる村人達から目を離さずに考える。

「グリフォンめえ、俺の、俺の、俺の村には、て、をてをださ、ださ、ださせない」

男がいた。若い男だった。そういいながら恐ろしい形相で秋山たちを睨みつけている。口から涎をたらし、手に持った鋤を振りかぶった。

秋山は構えたまま、声をかける。

「待て。私たちは君たちに敵意はない。武器を下ろせ」

「うううううううううう！」

飛び込んでくる。

「ひい」

秋山の後ろにいるマイは悲鳴を上げた。ただただ純粹に恐怖からにじみ出た叫びだった。彼女はこの訳の分からない状況に完全に怯えきった表情をしている。その前にいる秋山は刀に手をかける。

突撃してくる男は鋤を振りかぶって全力振り下ろそうとする、その前に秋山は飛び込んだ。素早く抜いた刀を構え、肩で体当たりし腹に突き刺す。

よけるわけにはいかなかった。秋山の真後ろにはマイがいる。

「え？」

マイは別の意味で驚愕した声を出した。彼女の視界の中で赤い色が噴き出す。

秋山は手元の刀を横にひねる。ぐちゅりとした感覚のあと、刀を引き抜き。男の胸ぐらを掴んで村人たちに投げ飛ばす。突っ込んできた男は「ぐりふおん……」とだけいって、人形のように倒れていった。秋山周作は軍人である。

彼はいくつかの戦場を超え、白兵戦をせざるを得ない場面もいくどかあった。それを彼はこの場で端的に示した。彼は血濡れの右手に、左手にその鞘を構える。

「聞け!!」

あたりを震わせる声を発する。

「攻めかかるなら容赦はしない! 言葉はわからずとも俺の叫ぶ意味は分かるだろう!!」

村人たちが一瞬だけ躊躇したようだったが、彼らはまた叫びだす。

「グリフォン!!」

「グリフォン!!」

「グリフォン!!」

一斉に飛び込んでくる。秋山は刀を斬るではなく叩くように使う。刀と鞘を振り回し、動き回る。何かが斬れる音がすれば刀に当たったのだろう。何か折れる音があれば鞘で骨を折る。

ヘクター達もその戦闘に加わる。ヘクターは剣を握り、先頭を進む。村人たちをただただ、手当たり次第に打倒す。殺すかどうかは「選んでいられない」。

所詮村人と傭兵たちである。戦闘というよりは蹂躪なのかもしれない。

「あ、あ、あ、あ」

呆けているマイの真後ろから矢が数本飛ぶ。それらは幾人かの村人に当たる。マイが反射的に振り向くと、弓を片手に彼女に駆け寄ってきた金髪のエルフがいる。彼女はマイに自分の身を守るように、短く言う。

言いつつ、金髪の少女エールの目には驚愕が浮かぶ。彼女の矢を受けた村人たちが立ち上がったのである。肩に、体に矢が刺さったままだった。

エールはその手に短弓を構える。そして背にした矢筒から矢を取ろうとして、落とした。

手が震えている。エールは自分を奮い立たせるように下唇を噛んで、もう一本矢を取り直す。その間に、

「グリフオオン！」

ナタを手にした男が迫る。エールは震える手に力を込めて弓を引く。歯を食いしばり、襲い掛かってくるあらゆる心の中の感情を押し殺す。

男が倒れる。血が飛び散る。

「マイさん、エール！ 大丈夫かっ？」

そこには血刀を手に秋山がいた。エールは構えた弓をおろし、はあと息を吐く。荒い息を整えて、殺さなくてよかったことに心から安堵する。そうしてから、その卑怯さを呪った。

足元に転がる男はナタを手にしたまま動かない。秋山はマイに近寄り、言う。

「マイさん。ここから下がります」

「……」

秋山の顔は血に濡れている。マイはただ、純粹にそれに恐怖にゆがんだ表情で迎えた。秋山は一瞬驚いて、わずかに目を閉じる。

(当然の反応だ)

目を開いた時、秋山はマイにゆつくりと伝える。その手を、彼女に触れることはしない。その「穢れた手」の拳を秋山は握りしめた。

「マイさん。今なら逃げられます」

戦闘訓練を受けていないだろう、そして粗末な武装の村人達との闘いは短時間に決着がついた。ヘクター達も下がろうとしている。村を出て森まで抜けるべきなのだ。秋山はただ事実だけを伝える。

「ここで下がる必要があります。空の化け物がどう動くかわからない」
「……………」

マイは目を開いて秋山を見ている。聞いているかどうかはわからない。ただ、その頬をエールがたたいた。ぱあんと音が響く。

「いたっ」

エールはマイに何か叫んでいる。言葉はわからないが、その言葉がわからないエールの方が秋山の意図を理解したのかもしれない。マイはただ無言でエールの言葉に頷いている。

その時、山々に響く咆哮がとどろいた。天に浮かぶグリフォンが羽ばたくと一陣の風に巻き起こる。

グリフォンは鷲のような顔に獅子のような体をしている。地面に降りたつとその巨体ゆえかあたりが揺れる。

「グリフォン」「グリフォン」

生き残った村人たちが口々に叫ぶ。グリフォンはそのクチバシを開いて、体に向ける。

炎は噴き出す。轟という音とともにグリフォン口から放った火はあたりを焼き尽くす。村人たちは体を焼かれ、転げまわりながら、

「グリフォン……」

と叫びつづけている。その声が途切れた時はその人間が終わったということだ。

グリフォンが叫ぶ。炎に囲まれているまま羽ばたけば、延焼が広がっていく。空に火花が散り、圧倒的巨体を震わせる。天の日はすでに落ち、闇夜を焦がす炎が立ち上る。

傭兵団はひるんだ。ヘクターは剣を納めて何かを叫ぶ。すると彼らは散開して別々に逃げていく。素早い行動だった。

ただ、その中にうずくまっている数人がいる。ヘクターはやれやれと黒髪を掻くと彼らにかけよって無理やり起こすと歩けないものには両肩を貸しながら下がっていく。

グリフォンの眼には彼の行動が映る。感動しているのではない。単に間拔けな獲物として映っているのだ。この化け物は地面に爪を立てると低い姿勢をとる。

「まづこ」

秋山は悟った。その一部始終を馬鹿げた冷静さで見ていた彼はグリフォンが炎をはくと直感した。

その瞬間には奔りだしている。マイのことはエールに任せるしかない。

炎の野を奔る。

秋山は叫ぶ。

「こちらだ化け物!!」

グリフォンの目が動く、秋山はその側面を走り抜ける。手には刀が一つ、鞘はどこにいったかわからない。グリフォンは炎を吐く。秋山の近くを焼き。彼は転がってよける。

(まるで陸軍のようなことをしているな。……あのグリフォンという魔物に村人を操っていたのか……? いや、今はいい)

すぐに立ち上がりつつ、彼は手に持った刀を見る。そして、目の前で咆哮をあげるグリフォンを見る。炎に包まれながら、化け物に刀一本で対峙することに秋山は苦笑する。熱さで顔についた血が乾いている。

「手榴弾でもあればな」

グリフォンが羽を広げる。そして口を開く。正面から見ればクチバシのその奥が赤く光っている。それは灼熱の色。秋山は荒い息を吐く。炎に囲まれて見えないが、あたりは誰もいない。

傭兵団もマイもエールも逃げる事ができたのだろうか、そう思ったのだ。

秋山は街で戦った男とのことを思い出す。あの時に受けた焰とは全く規模の違うグリフォンの攻撃になすすべを思い付かない。

「俺は、まだ生きて、戦わないといけない」

それでも秋山は諦めを持ってない。彼は祖国に帰り、戦うことを思う。

彼は一か八か突撃するために足に力を込める。

グリフォンの口から炎のブレスが放たれようとする、その瞬間に叫び声が聞こえる。あたりに広がる炎の中から人影が飛び出してくる。

「おおお!!」

グリフォンの側面に現れたのは黒髪の剣士。ヘクターだった。彼は手に持つ剣をグリフォンの足に刺す。赤い血が噴きだし、グリフォンが悲鳴を上げる。体のバランスを崩し、首を下げる。

怒りを伴ったその瞳にヘクターが映る。ヘクターは挑発するよう

に右手を上げてウインクする。挑発など化け物にわかるはずもないが炎を吐こうと口を開く。ヘクターは笑う。

秋山はすでにグリフォンの首元に来ていた。彼は無心に踏み込む。

「おおー」

上段から渾身の力を込めて首筋を斬る。血があふれると同時に炎が漏れる。グリフォンはのたうち回り、あふれ出る赤い血を自らの熱で蒸発させる。すさまじい声を発した後、秋山とヘクターの前にグリフォンは倒れた。どすんとその巨体から響く。

「……はあ、はあ」

秋山はその場に片膝をつく。死んでいてもおかしくはなかった。中途半端な距離でグリフォンに対峙していたら炎で炭になっていただろう。近くにいたことが幸いしたのだ。彼はおそらく助けにもどってくれたヘクターに目をやる。

ヘクターは頭を掻いている、いや髪型を整えている。彼も秋山の視線に気が付いてうっすらと笑う。その不敵な顔に秋山も笑ってしまった。

「言葉がわからなくても、あんたはいいやつだってことはわかるよ」

秋山はヘクターに言う。ヘクターはグリフォンの足に刺さった剣を引き抜いて、それからグリフォンの首筋を数度斬りきぎむ。態度は軽いが容赦はない。彼はそれから鞆に剣を納める。あたりは一面に炎が広がっている。

村だった、と言った方がいいかもしれない。村人たちの死体も焼かれていく。畑も家屋も。秋山は立ち上がりそれらを見る。なんら感想は漏らさない。たとえ襲われたとしても「こうなった」ことの一端は自分にあるとこの男は考えていた。

涙を流すことも悲しむことも彼はせず、二度と忘れないように見る。

その彼の肩をヘクターが叩く。彼は親指で後ろをさす。逃げようというのだろうか。どちらにせよここに長居はできないというのは秋山も思っていた。

咆哮がとどろく。

山々をとどろかせるこの叫びに秋山とヘクターは驚愕とともに空を見上げた。

村を焼く炎に照らされた暗い天。

そこに翼をはためかせるグリフォン「達」が秋山を見下ろしている。その目には敵意があふれている。秋山たちの斃したグリフォンの復讐をしようというのだろうか。

秋山は汗をぬぐう。最悪の中で最善を希求する程度、慣れてしまっていた。

鉄の魔王

その日は晴れた日だった。

あの時のことを秋山は何度でも思い出す。甲板にでて、青く輝く海原を見つめていた。故国を離れてどれくらいきただろか、彼は戦艦の上で大きく伸びびをして息を吐く。

海上の城ともいえる戦艦。彼は艦橋を見上げる。

戦争が始まってすでに半年以上たっただろうか、圧倒的な国力の差のある相手に互角以上の戦いをしていることが秋山の中に誇りとしてあった。彼は甲板を歩きながら、兵たちを見回る。右手で敬礼をくりかえし、微笑を絶やささない。

兵たちの評判は上々の若い将校。それがこの日までの秋山周作だった。彼は軍帽を白い手袋をした指で挟み、空を見上げる。白い雲が美しい。そのそばを海鳥が飛んでいく。

「あれはミッドウエー島から来たのかな？ いや、水無月島だったか」
白い雲、その間に何か光るものがある。秋山がそれに気が付いた時、雲に黒い点が浮かぶ。それはプロペラの音を響かせながら、降りてくる戦闘機達だった。

☆

地獄はすでに見た。秋山は空に浮かぶグリフォン達におびえるでもなく対峙する。あたりの炎はだんだんと勢いを増していく。身を焦がすような熱さの中で秋山は叫ぶ。

「ヘクターー！」

事態に硬直していたヘクターはつと我に返った。

その瞬間、空に浮かぶグリフォンの一匹が炎を吐く。一直線に伸びる火炎は秋山たちの近くを通り、ゴオと燃え盛る。秋山とヘクターは奔りだした。炎の間を駆け抜けていく。

グリフォンの一匹が降りてくる。彼らは全部で4匹いた。地面に降りたつと雄たけびを上げて、その前足を振り回す。土をえぐり、炎もお構いなしに薙ぎ払う。

当たれば人間くらいはひき肉にされるだろう。鋭い爪が秋山目掛

けて振るわれる。秋山は身を投げ出してよける。わずかな距離を死が通つていく。

秋山はすぐに体を起こし、奔りだす。

グリフォン達はやみくもに炎を吐き出した。すさまじい熱風とともにオレンジ色の炎が一面を焼く。秋山は地面のくぼみに伏せてやり過ぎすが、次に顔をあげた時にはすでに周囲を踊り狂う火炎に取り囲まれている。

刀を地面に刺す。

「はあ、はあ」

ぐるりと周囲を見回す。すでに逃げ場はない。

ヘクターはどうなったのかもわからない。秋山は流れ落ちる汗をぬぐいつつ、この瞬間にも思考を止めない。顔をあげれば、秋山を覗き込む4つの顔がある。

それはグリフォンという化け物の顔。目を爛々と怒りに燃やし、彼らは今にも秋山を殺すためにとびかかってくるだろう。

秋山は考える。

地面に穴を掘るか。無理である。

火傷を覚悟して炎の中を突っ切るか。おそらく燃え盛る炎に飛び込めば命はない。

グリフォンがとびかかってきたときに、その巨体を利用して飛び乗るか。そんな芸当ができるわけがない。

「……はあ、はあ」

死。

死が見える。

グリフォンの一匹が口を開けて咆哮を放つ。空を震わせるような声。星さえ落としそうな怒りに満ちた叫び。それらは秋山に仲間を殺されたことからの恨みだろうか。

秋山は荒い息のまま、この状況でも次を考え続ける。手はない、だが考えなければならぬ。常に「あの晴れた日」が脳裏にちらつく。何もできずに自らの仲間が死んでいく様を彼は見ていた。ゆえに異常なまでの生への義務心は、彼にとっては当たり前のことなのかもしれ

れない。

秋山は立ち上がる。刀を手にし、今にも炎を吐きそうなグリフォンに向けて構える。

「……」

化け物と対峙する。

「……」

秋山の目に周囲の炎が映りこむ。哀れなまでに男は戦うことをやめられないのだろう。

その瞬間に彼の手にある「刀」に刻まれた文様が強い輝きを放ち始めた。それは淡く、美しい赤色の光。秋山は何も分からずに困惑する。

——ああ、馬鹿だなオマエは。

頭の中に声が響く。秋山は一瞬あたりを見回すが、すぐに声の主を想う。

「刀か……？」

赤色の光に驚いたのかグリフォン達がわずかにあとじさるが、すぐに恐ろしい声で叫びはじめる。

——そうだ。お前の手にある「私」だ。私が今力を貸してやろう。望むならな。

すべてのグリフォンが口を開く。肺に満ちた焰を一齐に吐き出す。秋山は視界の端でそれをとらえながら刀の声に耳を、いや心を傾けた。刀から漏れだす赤い気が輝きを増す。

「……ああ、お前が何なのかはわからない。だが、俺は望む。生きるために力を貸してくれ！」

——そうか……そうか、あは、あはははははは！

炎が秋山を包む。その瞬間にも彼の心の中に高笑い響いている。地獄のような炎の渦。グリフォン達は怒りに任せてあたりを暴れまわる。すでに秋山は消し炭になったと彼らは思っているのだろう。

……あはははははは！！

炎の中に女の笑い声が響く。赤色の渦の中に黒が混ざる。それはだんだんと大きくなり。一気に放射線状に広がっていく。黒い線が

炎の中を奔る。それはまるで金属の塊のようなもの。

ぐぎやあ！

黒い線が一匹のグリフォンの体を貫く。さらにその体に何本、何十本、何百本の黒い線が突き刺さっていく。赤い血を吹き出しながら、悲痛な叫びをあげつつグリフォンは苦しみながらのたうつ。しかし、串刺しにされた体は動かない。

やがてその一匹はこと切れた。

炎の中で踊る一人の少女。赤いドレスを身にまとい。肩まで伸びた黒い髪の毛のほほには三日月のような文様が刻まれている。

「あははは！ 思い知ったかカス」

彼女の周りを黒い線が取り囲む、ギリギリと音をたててそれらは四方に広がる。グリフォンを貫く鉄のような材質であるのに凄まじく柔軟な矛盾した物質。そしてその塊がひとつ彼女の後ろにある。それが開かれると秋山がいた。炎の中で身を守ってくれたのだろう。

炎を背に彼女は嗤う。白い歯をみせ心底楽しそうに赤い瞳を煌かせる。

「我名は鉄の魔王ファルブラヴ。さあ、皆殺しにしてやるぞ有象無象共」

秋山は「魔王」という言葉に想う。「不死」の魔王とは違う、別の魔王がいたのかと。

☆

「黒い線」は赤いドレスの少女を中心に広がっていく。それは黒い槍ともいえる鋭利な金属の線。先端が尖り、ぎらぎらと炎に照らされている。

それは意思をもってグリフォン達に向かっていく。

驚の頭をした巨獣達はけたたましい唸り声をあげて威嚇するが、その体にくつつもの「黒い槍」が突き刺さっていく。赤い血が滝のように流れ、哀れなほどに大きな悲鳴を彼らは上げる。

「あはははー」

両手を広げて口角を吊り上げながら少女は嗤う。彼女は心底楽しそうに殺戮を行った。

圧倒的力を持つ彼女が右手を上げると、「黒い槍」が一匹のグリフォンを切り落とす。その自ら作り出した凄惨な光景に少女は笑い声を止めた。

快樂にゆがむ口元。邪悪さを表すその笑顔。彼女はただただ悪であることをその表情に滲ませた。

「残りはあ。挽肉にしてやるよお」

踊るように手を広げる魔王。かわいらしい少女。

黒い線がグリフォン達を切り裂いていく。血が流れ、切り裂かれ、髑。始末はいつでもできるが、その時間を彼女はあえて引き延ばしている。

秋山は、立ち上がる。彼の視界から見えるのは炎の野で笑う魔王、そしてグリフォン達の惨劇だった。彼の手にはあの「刀」はすでにない。どういう原理かはわからないが、この少女が現れた原因はそこにあるのだろう。

ただ、その残虐で容赦のない、戦う力もすでないものをいたぶる姿に秋山は嫌悪感を覚えた。まるであの日見た光景のようで。

「……やめろ……」

「……おお？」

魔王フアルブラウは今気が付いたというように振り返る。その瞬間に彼女の後ろでグリフォンの一匹が首を落とされる。赤い血を背景に彼女はニコニコと秋山に言った。

「ああ、お前か。やめろとはなんだ？ 誰にも何を言っている？ 次の言葉が気に入らなければ腕を飛ばしてやるぞ。よく考えろ？」

少女は明るく、そして容赦なく言う。

秋山は彼女の前に立つ。

「……助けてくれたのは感謝する。だが、無意味に髑るのはやめてくれ」

「……ほお。あんなけだものにもお優しいことだな」

両手組み少女は口角を吊り上げる。

「しかし、いやだ」

笑顔で拒絶する。

その瞬間に彼女の周りから無数の黒い槍が現れる。それは天へ一直線に伸びていく。地上の炎を表す赤い空へ。

そして黒い槍は無数の雨となってグリフォン達に向かって降り注いでいく。死んでいるものも生きているものも平等に無慈悲に黒い雨が貫いていく。最後の悲鳴が止むまで、終わることなく殺し続けた。できるだけ苦しむように。

ファルブラウはそれらをすべて終えた後に満足げに微笑む。

「あは」

その笑顔がただの屈託のない少女の顔だった。

秋山は一度目を閉じて息を吐く。そして、彼は言った。燃え盛る炎の野で彼は魔王と一人対峙する。

「……魔王、魔王ファルブラウ……。貴方は私の刀になっていたのですか？」

「そうだな。お前の荒い使い方には辟易していた。お前が死にそうだから死ぬ前に力を貸してやってただけだ。こーんな死体しかない場所で」

少女は踊る。

「放り出されるのはたまらないからな」

「……なぜ私と貴方は普通に会話ができるのですか？」

「質問の多いやつだな。まあ、いいさ。答える義務はない、勝手に考えて間違えて苦しみ」

ファルブラウは手ごろな岩に腰を下ろし、ニコニコ言う。

「さて、これから街の連中を皆殺しにしよう」

「!!! なっ、なにを」

秋山は驚愕した。いや、そうする以外にどうすることもできなかつた。

「それはそうだろう、私をあのような刀に封じ込めておきながら許されるわけがない。あとさあ。例えばあの生意気な魔王使いの女や、傭兵団の連中や、耳長のガキの首を並べてやればオマエハクルシムダロウ？」

ひひひひ、ああはあはは。彼女はまた笑う。

秋山は目の前のいるのが「邪悪」であることを強く理解する。打開策を探す。1人ではどうしようもない、ただもしも彼のもともとの世界の軍隊でもあればと思っただが無意味な妄想だった

「か、刀を渡したものはほかの場所にいるものと聞いていますが」

「人間の違いなんてなあ、どうでもいい。気にするな。みんな殺す。いずれ私を閉じ込めた連中も殺す」

話を通じない。秋山は思う。こんな魔王の前で自分は生きている。単に気まぐれと言えばそれまでもかもしれないが、そもそもこの少女は今まで「封じ込められた」と言っている。ならば、なぜ出てこられたのか。

「……では、私も殺すのですか?」

「……ああ、当たり前だろう」

一瞬の間があつた。秋山は考え続ける。

マイやエールの顔やあの最初に出会った猫の耳をした少女の笑顔が脳裏に浮かぶ。彼は今までこの世界で得た知識をできるだけ思い出そうとした。彼は天才ではない、だからできるだけ多くのことを考えることでその代わりとする。

マイと言葉が通じるのは特殊な道具を使って強制的に会話できるようにしている。

あれだけの容赦のなさを見せたこの少女が秋山を生かしている理由。

彼は「この次の言葉」を考える。想うことはすべて仮説にすぎない。この圧倒的な力を持った魔王に向かい合うには拙い論理に過ぎない。それでも彼は絶望的な状況でもただただ真剣に次を想う。

この少女と秋山の間にはマイと会話できるように何らかの「つながりがある」のではないか、彼はゆっくりと口を開いた。

「例えば私がここで自害すれば、どうでしょう」

「……………あ?」

笑顔が曇る。魔王の目に冷たさが宿る。意味が分からないという顔ではない。

秋山が解いたであろう「封印」は彼が死ねばなんらかの不都合が

ファルブラウにはあるのだろう。もしかしたら、黒い刀にもどるのかもしれない。

「死にたいのか？ 殺してやろうか？ おまえ」

「……死にたくはありませんが、かといって大切な仲間を殺されるようなことは見過ごすわけにはいきません」

「見過ごす？ 私はお前が死んだくらいでいったい何が困る？ お前の言っていることは支離滅裂だな」

「……なら、私の首もグリフォン同様に落としてみてはどうですか」

その強い目の光を湛え秋山は彼女を見る。睨むでも、ひるむでもなく。見る。

ファルブラウは立ち上がる。怒りのこもった眼の光。

「勘のいい男だな。ああ、いや。知っておったがな。街での騒動もなにもかも見ていた。……まあ、そこまで頭の回るものとは思っていたらなかったが……自らの痛みを意に介さないのは知っている」

ファルブラウは天を見る。悔し気に顔をゆがめている。

「そうだ、私はお前のような脆弱な人間に繋がっている。お前が死ぬば、私も、元の黒い塊に……刀にもどる。くそ、くそ、くそお！」

黒い槍が彼女の嘆きとともにあたりを切り裂く。草原に斬り、地面に突き刺さる。だがその一本たりとも秋山にはかすりもしない。彼は黒い槍の暴風の中で静かに佇んでいる。

「やっと自由になれたと思えば!! このような狂人に当たるとは!」
「……」

狂人、そういわれて秋山周作は苦笑した。彼自身が自分について思う時が多々あるからだ。今この瞬間にも彼は「やっと話ができるかもしれない」とすら思っている。この恐ろしい化け物に対してもその程度にしか考えることができない。

「そうだな私は狂人なのかもしれない」

自嘲が漏れた。あの日にからどこか感情が薄い。

ファルブラウは憎々しげに秋山を睨みつけ、無言で岩に座り込む。その状態の彼女を見るとただの人間の少女のようにしか見えない。幼さがわずかに残る顔立ちに黒い髪。秋山は聞く。

「魔王とは何なのですか？」

「……質問ばかりだな。知るか。死ね」

「……口が悪いな」

「ああ？ 人間風情が私と同格に話しかけるな」

「質問を変えましょうか。馬車であつた不死の魔王とは何かつながりがあるのですか？」

「……………馬車？」

その時だけはこの少女はキョトンとした顔を見せた。

「ああ、お前が気持ち悪く独り言を言っていた時か。お前には何かが見えていたのか？」

そういう言い回しであれば、多少傷つく。その時風がふいた。炎の延焼がまた広がり始めている。秋山は立ち上がる。少なくとも馬車での「不死の魔王」との会話はこの超常の存在にも見えなかったのだろう。もつと情報を得たいところだが、ここに立ち止まっていることはできない。

「ファルブラウ。避難しましょう」

「気安く……呼ぶな。行きたければ行け。死ななければお前など何の価値もない」

奇妙な言い方だが、その時秋山にはこの魔王の姿がなんとなく寂しそうに見えた。

それにこれだけ巨大な力を持ったものを野放しにしておけばどうするかわからない。先に「寂しそうに見えた」と思い、次に声をかける理由を探した自分に秋山はため息をついた。

「いや、私はこれからまた、戦いに巻き込まれるかもしれない。どうやらいろんな思惑が絡んでいるようだから……死んだら困るのだろう。ついてこないか、いや、付いてきてほしいだが」

秋山はファルブラウの前にしゃがんで手を差し出す。彼女はその手を睨みつけた後、彼の顔を憎々しげに見る。確かにこの男についていった方が自らの自由のためになる。どこぞで死なれても困るのである。

「いいだろう。だが、お前の指図など受けんぞ」

「いや、人を殺すのはダメだ。その場合は私が責任を取る」
責任を取るといふことは、つまりは自害するといふことだ。

「……貴様っ……手足を切り落とすぞ」

「出血多量で死ぬがいいですか？」

何を言われてもひるみもしない。ファルブラウは頭を抱えたが、秋山の手を取って立ち上がった。彼女は恨めし気に言う。

「貴様は、嫌な奴だ」

「そうだな」

即座に肯定した秋山の顔を魔王は何とも言えない表情で見ている。

秋山はすでに「この強力な魔王」を刀に封印してわざわざ秋山に渡した意味を考え始めている。

魔王のこと

そこにいた何もかもを焼き尽くすように、村は炎に飲まれていく。グリフォンが全て死に絶えてもその火を消す方法はない。その中を秋山は歩いていく。ぱちぱちと草木の焼ける音や家屋の燃えていく音に交じって村人達のうめきが聞こえてくる。

まだ生きていたのだろう、火の中に踊る人影を見てもどうしてやることもできない。

秋山の後ろについてくる赤いドレスの女性はそれを面白がりながら見ているようだった。秋山は彼女の抑えた笑いに想うところもあるが、何を言うわけでもなく無言で前を進む。

秋山は不意に足を止める。

足元に転がる一つの死体。黒焦げでもはや判別もつかないが、その手に握られている剣に見覚えがある気がした。鞘に納められたその剣は無骨な造りで飾り気がない。

秋山はその「死体」近寄り、手を当てて目を閉じる。「死体」はグリフォンの吐く炎をまともに浴びたのだろう。

(……ヘクター)

「なんだ、知り合いか？ おお、おおよく焼けている……ん、これはあいつか」

茶化すようなファルブラウの言葉などに僅かに殺意を覚えたが秋山は耳を貸さない。彼はその死体の剣を握る。炎に熱されていたのだろう剣を掴むとじゅうと秋山の手を焦がす、彼はわずかに顔をゆがめたが剣を取り腰に収める。

「できれば埋めてやりたいが、その時間もない。だから短く伝える。ありがとう」

人の「死」に対して経験を積みすぎた。秋山は静かにそう思う。

秋山は立ち上がる。剣は彼の率いた傭兵団に渡してやるつもりだった。ファルブラウがその彼の前にきて、死体を蹴る。ばらっと灰が飛んだ。

秋山は瞬間的に魔王の胸ぐらを掴んだ。目元が吊り上がり怒りに

こめかみに筋を立てる。

「なんだ。感情があるのか」

馬鹿にするようにこの女性は言う。透き通るような肌とその蠱惑的な瞳に秋山の顔が映っている。彼は己が右拳を握りしめていることに気が付いて、彼女から荒々しく手を離れた。

「……私を挑発するのはやめていただきたい」

「お前、他人が死ぬことに慣れているな」

「……戦争をしている国から私は来た、それだけのことです」

「ふーん」

フアルブラウは興味なさげに頷くと秋山の背中に向けて言う。

「こいつもかわいそうになあ。せつかく人を援けに来たというのに、結局は自分だけが死んでしまうとはな。なあ、どう思う。……お前、名前は確か……周作だったな」

秋山は一度空を見る。暗い。心がそう感じるのだろうか。

「生きてしまったのなら、自分のやれることをやるだけだ」

「優等生のような回答だなあ」

フアルブラウは嘲笑する。秋山はそれなのに反応を示さずに歩き始める。

☆

森に入るとまだ延焼は広がってはいなかった。いずれ村の火が燃え移ってくるかもしれない。秋山は途中で拾ったフード付きの外套をフアルブラウに着せていた。彼女は嫌がったが、半ば無理やりにはおらせた。

一応女性である。火の粉が飛んで肌を焼いてはだめだというのが理由だった。秋山は「女性」に対しては無差別に保護すべき思考が働くようだった。彼の率直にフアルブラウにそれを言うと言った彼女は呆れながらもしぶしぶ羽織った。

彼女は紐で結ばれたサンダルのような履物をはいている。山道は大丈夫かとすらも秋山は考えている。

「背負うべきか？」

「……おまえ……ばか……か？」

ファルブラウは真剣な顔で聞いてくる秋山に素直に言った。彼の妙な誠実さは魔王も困惑させてしまったようだった。この可愛らしい魔王は秋山に憎まれていてもおかしくはない、ただ個人の感情とは別に秋山は彼女を気遣っているらしい。

秋山は先に分かれたマイや傭兵団を探して歩く。できれば夜に歩き回るのは避けるべきということを考えながらも木の枝を折りながら進んでいく。本来であれば街道に出るべきだったと多少悔やんだ。彼らは歩きながら話す。

「聞いていいですか」

「……なんだ」

ファルブラウの瞳がフードの下で光る。

「私は軍人ですから回りくどい言い方はでない。そのため」

「十分回りくどい。なんだ」

「……魔王とはいったい何だ？」

「その質問何度も聞いてくるな。別になんでもいいだろうに」

「私はもう一人の魔王と会ったことがあります。アスモデウス・ヴェルスとその女性は名乗っていましたが」

「知らん」

にべもなくそう言い放ったファルブラウだが、少し考えてから言う。

秋山の口調は彼女への感情を比例して崩れてきている。

「しかし、まあ質問自体には、何も知らぬようだから教えてやろう、『魔王』とは人間側の呼称のことだ。私のような力を持ったものを人間どもが恐れて付けたものだ。だから歴代の『魔王』というものは一人や二人ではない。お前のあったというそいつも今、魔王と言われているものだろう」

「……言ってしまうえば渾名（あだな）のようなものか」

「私は数百年前に人間どもと争って『鉄の魔王』としてそれなりに殺してやった、まあこれからも同じようにしてやるつもりだがな」

秋山はファルブラウを見る。

「数百年……」

「そうだ」

その短い言葉の間にファルブラウは少しだけ寂しそうな顔をした。だが、すぐに秋山を睨みつけるように言う。

「断っておくが、今の魔王などに興味はない。私を利用してしても無駄だ」

「……そんなつもりは毛頭ないが」

秋山は得た情報を頭の中で整理する。魔王と言われるものは一人ではないということだが、マイの話を考えると現在はあの「不死の魔王」だけのようだった。

「ただ、私は、その魔王を斃すために呼ばれたそうだ」

秋山はファルブラウの顔を伺いながら話す。その反応を試しているのだ。彼女の目がフードの下で光る。その表情は少し呆れたような、馬鹿にしたようなものだった。

「そうかあ。まあ、頑張れ」

本当に興味自体はないのかもしれない。彼女はそれだけを言った。どうせ無理であろうという気持ちもあるのかもしれない。秋山は枝を折りながら彼女を観察している。

わからないことがあればできるだけ多くの情報を得ること、それを秋山は今までの人生で学んでしまっている。馬鹿にされていること自体は、それも単なる「情報のひとつ」でしかないのだろう。彼の心には何のさざ波も起こらない。

水の流れる音がする。

茂みを抜けると目の前に川が見えた。川幅は狭いが、木々の間に切れ間ができ空に浮かぶ月が見える。水流は意外と速く、白い飛沫をあげながら流れていく。

気が付けば喉が渴いている。秋山は近くにある岩に腰を下ろした。今朝から何度も死線を抜けている気がする。わずかに緩めた気に引きずられるように疲労を感じてしまった。かといって水を飲むわけではない。生水を飲んで倒れるほうが問題と思っている。

ファルブラウも適当な岩に腰かける。片膝を抱えるような座り方で、あくびをしている。

秋山はこれからのことを考えていた。

流れるように様々なことが起こってゆつくりと考えることができなかつた。彼の思考は意外と単純である。「国に帰り、戦う」ただそれだけであつた。魔王討伐のようなことをするのは当たり前だが彼の本心ではない。

かといつて帰り方も分からない。秋山はだんだんと広がっていく眠気に抗うように頭を掻く。

不意に影ができる。秋山が顔をあげるそこには一人の女性がニコニコとして立っていた。

「や！ 秋山君」

艶やかな桃色の髪が夜風に揺れている。優し気な表情とそのほほには赤い文様。秋山は彼女のことをよく覚えている。「アスモデウス・ヴェルス」不死の力を持つ魔王だつた。

秋山はファルブラウを見る。彼女はそっぽを向いている。気が付いた様子はない。依然の馬車の中でもそうだが秋山にしか見えないのかもしれない。

だから彼は探るように言う。

「神出鬼没ですね」

「そういう魔法だからね」

明るいい口調でアスモデウスは言う。かわいらしさすら感じるこの女性が「魔王」であることに秋山は違和感しかない。彼女はファルブラウを見て言う。

「あれは……人間じゃないわね。『鉄の魔王』だつたかしら？」

知らなかつたのか？ 秋山は思うが口に出さない。

「ええ、危ないところを助けられました」

「そっかー。よかつたねー。でも、よく生きて帰れたね。感心感心」

「……あの村のことは……あなたが仕組んだんですか？」

「仕組んだ？ まあ、そういうところもあるかな」

微妙な言い回しを彼女はする。ただ、その表情には優しげな笑顔を張り付けている。声音は軽く明るい。

「グリフォンを呼んだのは私ではないよ。秋山君。本心から君が死な

なかつたことを喜んでいるんだからさ。ねっ?」

「それは、どうも」

アスモデウスはにっこり笑って、くるっと後ろを向く。月を仰ぎ見て、両手を後ろで組んでいる。彼女はゆったりとした口調で話す。ファルブラウにはやはり見えていないようだった。

「ね、秋山君。魔王と言うのは昔から大勢存在したものだよ。この世界では」

「……」

「もともと魔王というのは人間の呼称で、力を持ちすぎて魔物や『人間』に与えられた蔑称でもあるの」

「……」

「例えば『傲慢の魔王』と言われた男は多くの国を火の海にして討伐された」

「……」

「例えば『黒死の魔王』と言われた少女は何万人と殺して人間の英雄に打倒されたわ」

「……」

「例えば『蒼翼の魔王』と言われた龍は、危険だからというだけで人間と龍との戦争で殺されたわ」

「……」

「例えば魔王を討伐した人間の英雄は濡れ衣を着せられて、追い詰められた末に本当に虐殺をして本人の魔王と呼ばれたりもしたの。これはここ数百年の話ね。もっと前には『原始』の魔王というものもいたの」

「そうですか。随分といるものですね」

「ねー!」

アスモデウスは先ほどの秋山の疑問を聞いていたのかもしれない。少し楽し気に説明してくれる。

「でさー、私そいつらを蘇らせて世の中を変えようと思っているのよねー」

振り向いたアスモデウスは楽しそうに、麗しい笑顔で秋山に言っ

た。まるで遊びに誘っているかのような口調で。秋山は絶句する。なんといいつていいのかわからない。

「手始めに秋山君。君が来た街を10日後に皆殺しにしようと思うの、あ。もともとその予定だから、君のせいじゃないよ。ごめんね？」

「なっ!」

秋山は立ち上がる。ファルブラウは「ふあっ?」と妙な声をあげている。くすくすとアスモデウスは彼の顔を見る。

「なぜそのようなことを!」

「……さてさて、なぜでしょう?」

両手を小さく万歳しておどけてみせるアスモデウス。彼女は自分の唇を舐める。

「秋山君。そこにいる『鉄の魔王』と言う子だけど、その雑魚にあんなり期待しないほうがいいわよ。これ、私からの忠告。あと、逃げるも戦うも自由だけどこれも私から君へのプレゼントな言葉」

「雑魚……? ファルブラウが……?」

ファルブラウは立ち上がる。その言葉にかちんときているらしい。フードを脱いで両手を組む。

「周作。そこに何かが見えるのか? さつきから一人でぶつぶつぶつぶつと言っているのは」

「ああ……おそらく私にしか見えないのかもしれないが……魔王が目の前にいる」

「ほう、そうか、さつき話していたやつだな。私を雑魚呼ばわりとはい度胸だ。聞け、そこにいるこそこそ隠れるしか能のない臆病者にな」

両手を組んだままファルブラウは魔力を開放する。

黒い瘴気のようなものが空間を歪め、空気が重さを持ったかのように秋山は威圧を感じる。

「我名は鉄の魔王ファルブラウ。私を雑魚呼ばわりするならば、ここにきて私と戦うがいい。切り刻んで川に捨ててやる」

「ファルちゃんか」

アスモデウスは全く意に介さない。彼女はファルブラウを一瞥しただけで秋山に言う。

「ファルちゃんにはそんなに期待しないでね。10日後に目を覚ます魔王はたぶん、今のあなたじゃ、どうしようもないわ」

アスモデウスはそれだけ言うと、「ばいばい」と手を振った。彼女の唐は光の粒子になって消えていく。少なくとも秋山にはそう見えた。秋山は呆然と立っている。

「おい。周作」

「……」

ファルブラウは聞く。

「奴はどうした。なんと言っている」

「消えた。10日後にあの街を皆殺しにすると行って」

「そんなことはどうでもいい。私に何かいつていただらう?」

その物言いに僅かにイラついた秋山は、はあとため息をついて言う。

「ファルちゃん。と言っていた」

「ふあ! きさま、なんだそれは!!」

秋山は彼女の声を無視して考え込む。アスモデウスの言葉の真偽がどうであれ、グリフォンを圧倒した『鉄の魔王』以上のものがあるなら、自らだけではどうしようもない。

大勢の力、換言すれば、

「軍隊が必要だな」

秋山は短く言う。

守るべきもの 前

不死の魔王とのわずかな邂逅。秋山は静かになる虫の声の中でたつ。空を見ればいつの間にか雲が出てきている。

「鈴虫の声に似ているな」

遠い故郷の「音」を思い出す。僅かな時間を過ごしたこの世界にはあるが、幾度も死にかけ、さらにその昏迷は深まろうとしている。そもそもなぜ自分がここにいいのかすらもわからない。

すべてのことに意味がある。

すべてのことを理解することはできない。

秋山は目を閉じて、思考を整理する。時間にすれば僅かだろう、その表情を少しも動かさずに次に何をすべきなのか彼は決める。

それが正しいのかどうかはわからない。正しいことのみを選ぶことができるのであれば、どれだけ素晴らしいだろうか。

「行くうか」

怪訝な顔で秋山を見ていたファルブラウに彼は声をかける。

この黒髪の魔王は特に返事をすることなく黙ってフードを被りなおした。死体を蹴り飛ばす、魔物を躊躇なく斬殺する。その思考は読みにくい。秋山は彼女の資質について多少の仮説を持っている。

黙っていても相手を見透かすような言動。それは裏を返せば相手への理解力を示している。ただ、それを口に出すと彼女は怒るか、呆れるかするだろうと秋山は微笑を彼女に向ける。

目をほんの少し見開くファルブラウは次に呆れたように言う。

「気持ち悪い」

どちらにせよ呆れられるのであれば言ってもよかつたのかもしれない。秋山は苦笑しつつ森の中を進んでいく。夜空に浮かぶ月が陰り始めている。方向もいずれわからなくなるだろうと彼は思う。

秋山が歩くたびにくしゃくしゃと落ち葉を踏む音がする。体は重い。ただ、後ろを歩くファルブラウの歩きやすいように目線の高さにある枝を折り、石があれば声をかける。

(マイさんたちはどこに行ったのだろうか。早く合流したいのだが)
そう思ったとき不意に空を見上げる。一筋の煙が空向かって伸びている。その方向に誰かがいるのだろうか。おそらくは何らかの合図と彼は思った。

「あつちか」

歩を進める。蛇や獣がいるかどうかを警戒しながら。ファルブラウは黙っているがその大きな瞳は秋山をみたり、周りを観察したりとくりくりと動いている。本人にその気はないのだろうか、かわいらしい仕草だった。

「おい」

ファルブラウは呼びかける。秋山は立ち止まらずに「なにか？」と短く答える。

「お前の手にある剣、あの男のものだろうか？ 傭兵の連中に言うのか？ お前を助けに来て死にましたと」

「言う。私を助けにもどってきてくれたと」

「残念になあ。お前がいなければあれも死にはしなかったと思うんだがなあ」

「その通りだ。私に責任がある」

「……ちっ」

秋山は戦場での死を淡々と受け入れる自分に僅かながら想うところがあるが外に出さない

面白くないとファルブラウは舌打ちした。

☆

迎え入れてくれたのは耳の長い金髪のエルフだった。

エルルは秋山のことを見ると駆け寄ってきた。やはり傭兵団が集まっていたのだ、彼らは焚火を囲みそれぞれが腰を下ろしている。周りには見張りを立てながらだった。

エルルはにつこり笑って秋山に抱き着こうとした。だが秋山は婦女子にみだりに触るわけにもいかず、その両肩を抑えて微笑みかける。エルルは少し不満げな顔で何か言っている。

言葉はわからないがどうやら特にけがはないようだ。見れば傭兵

団のほとんどがいる。もともと秋山は全員の顔を知らない、だから全員いるのかはわからない。

いや「全員」はいない。

秋山はエールを見る。彼女の瞳に映る自分。無力な「そいつ」を憎みながらも黙って、剣を彼女に渡す。

エールはその剣をちよつと口を開けた、ぼんやりした顔で受け取る。彼女は秋山を見る。秋山はただ黙っている。

このエルフの少女は一瞬顔をゆがめて剣を抱きしめた。過去のことは秋山にはわからない。ただ彼は「すまなかつた」と言葉にした。その言葉にエールは顔をあげた。

悲し気な笑顔で彼女は秋山に向き直る。その表情はただ、やさしい。

「バリオ」

彼女はそれだけを言って秋山の肩を叩いて、大切そうに剣を抱きしめながら傭兵団の中にもどっていく。一部始終を見ていたのだろう傭兵団の人間達も黙っている。ヘクターが帰らないことを彼らはわかったのだろう。

ファルブラウは秋山の後ろで「つまらん」と吐き捨てた。ただ秋山は思う。

(責めてくれないことは、つらいな)

言葉には出さない。彼は黙ったままマイを探した。エールと一緒に逃げたはずである。だからどこかにいるのだろう。ふと見ると、焚火から一番離れた場所にちよこんと小さくなつて座っている。頭の上から布を被っているようだった。

「マイさん」

びくつと彼女は震える。秋山はしゃがんで座っている彼女の目線に合わせる。

「無事でよかった」

彼女は何も答えずに身を縮こまらせる。秋山は特に何も思うところはない。怖いのは当然なのだ。彼女は被った布の間から顔の半分をだして、片目だけで彼を見る。

「ごめんなさい」

「なぜ謝るんですか？ 無事に逃げてくれてほっとしています」

「ごめんなさい」

恐怖で混乱しているのだろうか秋山はそう思った。少しそつとしておこうかと立ち上がりかけた時、彼女はとつとつと話しだす。

「あの時、秋山さんに助けられた時、その………あ………だが………躊躇なく、人を、殺し……いやその助けてくれて……そのとき、血が……みえて………剣で………」

ただたどしく話す彼女の言葉に秋山にはわかった。

（ああ、『恐怖』させているのは……俺か）

マイを恐れさせているのは自分だろうと彼は直感した。どういう言い訳をしようと彼は彼女の前で殺人を行った。意図的にただ「効率的」に相手の生命活動を停止させる方法もとつた。刀を刺して手首をひねる。その感触は残っている。

マイは震えながら「ごめんなさい」と繰り返している。助けられた感謝、「殺す」という行動をした男への嫌悪、様々な感情がないまぜになっっているのだろう。

秋山は自らの両手を開いてじっとみる。少しだけそうしてからマイに言う。

「安心した」

「……え？」

「……私は人を殺すための訓練を何年も受けてきました。実際に、何度も戦場に往来して知りもしない相手も、自らの部下も、上官も、その死に深くかかわってきたから……どこか感情が鈍いんです」

「……」

「人の死に感じるものが少ない……そういう風になっている自分に時折想うところがありますが、マイさんがちゃんといろんなことを感じていることに私は、ただ安堵した……悲しいことも、怖いことも、単なる嫌悪も……あつてしかるべきことです」

「……私は……」

「二度だけ偉そうに言いますが、良く落ち着いて考えなさい。貴方の

中に生まれた感情を否定する必要も、自分を責める必要もないんです」

秋山は一度彼女に触れようかと思ったが、その手が穢れているような気がしてやめた。黙ってたちがあると、後ろで苦虫をかみつぶしたような顔で立っているファルブラウがいる。もつと破滅的な言い争いでも望んでいたのだろう。

「悪いな」

ファルブラウへは軽口が多くなってきた。この魔王にはどこことなく遠慮する必要を感じない。

「わ、私は！」

マイは立ち上がる、自分でかぶっていた布が地面に落ちる。彼女は顔を赤くして、大粒の涙をためて、秋山に叫んだ。

「秋山さんに助けてもらいました！ でも、でもこういう……素直じゃないんです！ ありがとうございますっていえばいいのに、逆に慰められるなんて、わけ、わけがわからない」……

秋山はその背で聞く。彼は何を答えるべきか考えて、ふと自分が「どう受け答えるか」を冷静に思っていることに内なる嫌悪をいだく。それがわずかに思考を鈍らせてしまう。

「パンを」

「はへ？」

秋山は自分で何を言っているのか一瞬わからなかったが、それは言われたマイのほうがさらに輪をかけて意味が分からず妙な声を出していた。

「パンを、1つ焼いてくれたらいいな」

(……何を言っているんだ?)

秋山は自分の言葉に思う。黙っていたファルブラウは口をあけて「はあ？」と言っている。

(たぶん俺は、マイさんが恩に着てくれていることを解消するために何か、簡単なことをさせてあげようと思ったんだろうか)

自分のことなのに、分析しなければわからないのがこの男の悲しいところなのかもしれない。そもそも焼いて「くれ」ではなくて、「いい

な」と言ってしまった。ただ、マイはうつむく、その口元をわずかにほころばせながら。

「い、いいですよ……ぱ、パンを焼くのは得意ですから……!」

秋山は逆に恥ずかしくなってきた。思いがけずに行ってしまった言葉が、計算のない言葉がなにやらしい方向に転びそうな状況を彼は処理することができない。

「え、ええ。楽しんでいます」

「……はい」

定型文的な返答をして秋山はその場から離れようとする。しかし、彼にもう一度マイが呼びかける。

「あ、あの秋山さん。その……そちらの方は？」

マイはずつと近くにいた女性に目をむける。黒髪に印象的な瞳、顔に文様のある彼女は何者か、純粹に気になるのだろうか。ファルブラウはフードを取って、にやりを笑う。

「魔王ファルブラウドだ。小娘さん」

秋山は彼女を振り返った。マイは「はい？」と呆けている。

☆

雨がしとしと降り始めた。

夜に降る雨の中を一つの集団がいく。彼らは疲れていた。とある村での戦闘を終えて、その首領を失った傭兵団。その中に秋山はいる。

秋山がみればけが人はほとんどいないようだった。おそらく秋山の合流する前にマイが癒しの魔法を使用したのだろう。

本来であれば夜にしかも雨の中に進むのは危険だったが、そもそも村人があれで全ていなくなったかもわからない。追ってくることも考え、夜のうちに動き出したのだった。それでも秋山は歩きながら想った、顔を大粒の雨が叩く。

「これで炎も消えるだろう」

村はグリフォンとの死闘で炎に包まれているはずだった。延焼を考えればこの雨は天佑だと彼は思う。一番前をマイが歩いている。彼女はちらちらと後ろを振り向きながら歩いている。彼女は右手を

前に出して、手のひらの上には小さな青い炎が燃えている。

魔法の一種だろう、彼らの前途を照らす小さくも確かな明かりだった。先頭をマイの後ろにはエールがついて何か指示をだしている。彼女の腰にはヘクターの剣が差しであった。

傭兵団もほかの者も雨に濡れないようにできるだけ何かを被っている。マイも先ほどかぶっていた布を頭にしてしている。手のひらの炎は何故か消えることはない。

ただ秋山は特に何もせず歩いている。むしろ何かを洗い流されるような感覚があつた。

彼らの歩く道は鎧や武器のぶつかる金属の音だけが響く。足音は雨音に消されていた。ファルブラウも秋山の後ろについて黙々と歩いている。

「……聞いていいか」

雨の中の会話だ。ほかの者には聞こえないだろう。秋山はそう思つて声をかける。

「なんだ？」

「なんできつきはあんな軽率な真似をしたんだ」

ファルブラウはマイに正体を聞かれたときに何も隠すことなく言った。「自分は魔王である」と。だが彼女はあつげらかんと答える。

「阿保め。信じるわけがないだろう」

「……急に現れたものがいきなり魔王だった、とは確かにわからないだろうが」

「嘘をつくのも面倒だから、そういった。どうせあの小娘も10日後には死ぬんだ。別にどうでもいい」

「……」

「おっと、勘違いするな。ほかの者たちも今の魔王とやらの送り込んでくるものに殺されて死ぬだろう。私はこいつらが皆殺しになつてから、そいつを始末するつもりだ。こいつらを私が殺すわけではない、お前との約束を破る気はないぞ。どうだ？」

ファルブラウは秋山を見る。雨がその白い肌を濡らしている。

「うれしいか？」

「……まあ、その程度のこととは考えていると予想はしていたが、つまり助力はしないということだな」

「ちっ、相変わらずつまらない反応をする男だ。ああーそうだ」

すねた顔でそっぽを向くファルブラウ。彼女はできれば秋山の悔し気な顔を見たかったのだろう。すぐにいたずらっぽく笑い、ずけずけという。

「どうせオマエはほかの連中とまともに言葉も通じないんだ。しかし、これからどうするつもりだ?」

「街に帰ったら有力者と会う。そして防備を整えるように請願するだけだ」

「どうやってだ? 意味不明な言葉を話す、しかも魔王が出ましたな」とイカレタ夢のような話を誰が聞くんだ?」

「……………」

秋山はファウブラウの顔を見る。秋山たちの前途を心底楽しんでるような邪悪を含んだ顔だった。ただ秋山は言う。

「やはり、お前は頭がいいな」

「なに……………」

「随分と私、いや俺のやるべきことを想像してくれているじゃないか。そうお前の言うとおりだ。言葉が通じない。よしんば通じても、そのまま話をすればともすれば俺自身の正気を疑われるだろう。よい指摘だ。参考になる」

「なっ……………」

秋山の涼しげな顔を憎々し気にファルブラウは睨んで、ふんつと横を向いた。口ではどうやら敵わないらしいということが彼女の自尊心を大きく傷つけた。だから彼女の言葉も少し稚気に染まった。

「死んでしまえ」

「心中したいのか?」

「ぐう」

魔王はぐうの音を出す。秋山は流石に笑いたくなくなったがやめた。秋山が死ねばファルブラウ自身もただでは済まない。

しかし、黒髪の魔王の言ったことは深刻な問題ではあった。秋山周

作はこの世界になんの伝手もない。また、言葉も満足にわからない。(マイさんの力を借りることになるのか……。いや、しかし、できれば早く避難をしてほしい)

秋山は正直に言えば「有力者」と会うためのパイプをマイ以外に持っていない。しかしこのような話を彼女を通してしまえば、彼女にとってよい結果になるかはわからない。

雨の中を考えながら進む。舗装されていない道に足を取られることがあるが、馬車などが無いのは寧ろありがたいことだった。マイが先頭で「へくち」とくしゃみをしているのは流石に心配だった。

道を歩いていく。思案する時間はそれなりに合った。たまにエルが横に着てぺちやくちやと話していくが当たり前であるが言葉はわからない。ファルブラウは言葉をわかるだろうが、むろん通訳などしてはくれない。

この金髪のエルフは秋山が何か言うときそれを口真似している。それから彼をじつと見てはまたどこかに行く。

ふと霧が立ち込めてきた。白い靄があたりを包んでいく。流石に彼らは進むことができずに立ち止まり、木々の間にそれぞれ入る。

「ん」

秋山の横でファルブラウが声を出した。何かを気にしているような仕草に秋山は聞く。

「どうした?」

「……別に」

「そういう口調時は大体何かありそうだが?」

「ちつ、やかましいやつだな。……大したことじゃない。この霧には魔力が混じっている。それもほんのわずかだが……」

「……………俺はこの世界の霧には詳しくはないが、おかしいことなのか」

「変な確認の仕方をするな、まあおかしきさ。どうでもいいことだがな」

言われなければただの霧である。雨の中で秋山は空を見上げるが、白いそれに遮られて何も見る事ができなかった。「あの村」もこの

ような霧に包まれたことがあったとは彼に知る由もないことだった。

☆

しばらくすると霧は晴れた。

休みを挟みながら彼らは進む。いつの間にかもともと来た道である街道にも復帰していた。だんだんと雨も小降りになってきた。

空が明るくなっていく。雨に現れた空気の中で、山の間から太陽が昇ってくる。朝焼けに空は赤が広まり、だんだんと蒼に染まっっていく。冷たい空気が逆に秋山には心地よく感じた。

歓声上がる。傭兵団が無邪気に喜んでるのは視線の先にあの城塞都市が見えたからだだった。秋山も流石にほっとしたような気がしたが、数日後のことを考えればあの街で惨劇が起こるかもしれない。

朝日を受けながらただ静かに佇む街。秋山は何も言わずにそれを目に焼き付けている。何が起こるかはわからないが、やらなければならないことはすでに考えている。

「へくち」

マイが傍らにきてくしゃみをした。彼女は秋山を見ると恥ずかし気に顔を背ける。何か用があったのだろうがくしゃみをするところ見られたのがなんとなく恥ずかしいのだろう。

「マイさん、戻ったらよくよく体を拭いてあったかくして寝た方がいい」

「……秋山さん。なんていうか、私のこと子ども扱いしてませんか？」

「え？ そんなことはないですよ」

穏やかな朝の中を歩く。マイは濡れた髪が肌に絡みついている、それを指でまいて、少し口をとがらせていう。

「いえ、きつと子供に見えます。私はもう大人ですよ？」

「……そうですね。無意識に失礼な物言いをしていたのかもしれない、すみません」

「……うー。それですよ、さつきちよつと聞いたらファルブラウさんとの話し方とぜんぜん違うじゃないですか？」

「はっ？ あれと？」

「あれ」が後ろで眉をしかめる。秋山は自分が不意にぞんざいな言葉遣いをしてしまったと慌てて取り繕う。別にファルブラウに気兼ねしているわけではない。

「それよりマイさん。街にもどつたらいくつか聞きたいことがあるのですが、ゆつくり話す時間はもらえますか？」

様々なことを知っておきたい。秋山は切実に思っていた。この国のこと、魔法のこと、魔王のこと、軍隊のこと、有力者のこと。数え上げればきりが無いほどに情報を欲している。ただ彼の表情はあくまで穏やかだった。

少女に責任を負わせるようなことをしたくはないというのが秋山の本音であった。ある意味彼の倫理観の境界は「情報をもらおう」までなのだろう。マイはちらりと彼を見て、いいですよと呟くように言った。

「パン、焼いてあげないといけませんしね」

大きな彼女の瞳に秋山が映る。その中の彼は苦笑していた。つられてマイも笑う。彼女が微笑むと、花が咲いたようなかわいらしさがあった。

城壁が近づいてくる。城門は閉まっているようで、その前に人だかりが見えた。門は悪時間が決まっているため、夜のうちにやってきた商人や旅人は思い思いに休んでいるようだった。

(……中は安全だろうか)

このわずかな旅の前に秋山とマイは命を狙われた。街中での襲撃を受けたのだ。警戒が必要ではあるが、傭兵団と一緒にあれば簡単には攻撃してこないだろうが、警戒するに越したことはない。

秋山は顔をあげた。高い城壁を見上げる。石材が均質に組み立てられている。流石に秋山の国に「城壁」はないが見事な造りだと素人の彼にもわかる程度には頑丈に作られてそうだった。

「ん？」

城壁の上から誰かが覗き込んでいる。頭に猫のような耳をびこびこさせて、秋山と目が合うと嬉しそうにしている、そんな気が彼にはした。栗色の髪が風に揺れて、秋山に一度手を振ると、どこかに行つ

てしまった。

「……アーエ？」

秋山はそう口に出してから、彼女が無事だったことに心底ほっとした。彼がこの世界にきて一番初めに会った少女がそこにいたようだった。かし、彼女が何をしていたのかはわからない。

守るべきもの 中

秋山達が「街」にたどり着いた同じ朝のことだった。

とある貴族の領地、その領主の城のことである。雨の上がった空は青く澄んでいた。その日に光に照らされたその城は白い城壁が美しく輝いてる。

その城の周りには堀がぐるりと囲み、そのさらに外側には市街が広がっている。家々は整った街の大通りに整然と並んでいる。この領主はあたりでは「名君」としての誉れ高かった。

「ふああ」

そんな中で男は大きなあくびをしながら体を伸ばした。背は高く、肌は浅黒い。くすんだ赤色の髪をしていた。黒い服を着て、そこから伸びる手足には男らしく筋肉をまもっている。

彼はのんびりと歩いていた。いい天気だと思いつながら街の真ん中を歩いている。顔に刻まれた文様の上をぼりぼりと指でかきながら、もう一度大きなあくびをした。

男は話し合いに来ていた。「名君」に会いに来ていたのだ。

街中では朝早くなのに子供たちが遊びまわっている。男は彼らに手を振ると、子供たちは旅人だと思って彼に笑顔で手を振り返してきただけで男は笑顔で殺した。

男はのろのろ歩く。

城は大きく近づくほどにその大きくなる威容に男は感嘆する。そんなとき男を呼び止める声がある。彼は振り返ると、そこには包丁を構えた少女が何か喚んでいる。黒髪の美しい少女だった。彼を睨みつけるその眼には殺気がこもっている。

男ははて、と首を傾げた。特段睨まれるようなことはしていない。少女は弟がどうのと叫んでいるが、男には何のことかわからない。彼は右手に魔力を集めて、少女の周りに放つ。彼の手がぐっと握られる

と魔力が少女を中心に収束してくしゃりと彼女はつぶれた。

「まったく、なんだというのだ」

ぷりぷりと怒りながら男はまた歩き出す。言いがかりをつけられて彼は訳が分からない。通りかかりに数人殺して彼ははあとため息をついた。よくよく考えたが朝飯を食べていないのである。

商店らしきものを一つ潰して物色してみたがどうやら雑貨屋だったらしい。年老いた主人が生きていたのでがれきの中から引き出して聞いてみる。その頭をつかみながら。

「あー、少し聞きたいのだ。飯が食べたいのだが、店はどこだ？」

「……」

頭から血をながらして主人らしき者が答えないので男は仕方なく首を振り切り捨てた。

「ふんう」

とりあえずいくつかの家々を破壊したら、パン屋があった。男はそこにあったパンをもぐもぐと食べながらまた歩き出す。

「なかなかいいパンを作るではないか！」

大いに右手に持ったパン屋にいた男の首をほめる。彼は惜しみない賞賛をいくらか言ってから捨てた。そうしていると大勢が彼を囲んだ。彼らは何故か武器を手にして何かを喚んでいる。

男はパンをかじりながら「まてまて話し合おう、なにか勘違いしておりはせんか？ 儂はなにもしておらぬ」と言った。よくよく見れば彼らは兵隊のようだった。男は何もしていないのに武器を向けられて怒りそうになったが耐えた。重要なのは忍耐だった。

男は右手を天にかざし魔力を集める。周囲に集まる黒い魔力の奔流。それが彼と兵士たちを包む。男が右手をぐつと握ると魔力が凝縮して、兵士たちはつぶれて死んだ。

男は一人たたずんでいた。穏便にことを納めることができずとしていた。彼は死体を踏まないように気を付けて歩いた。礼節は人間にとって大切らしい。話し合いをするために来たのだからそれくらいは必要なのだ。

城にも兵隊らしき者たちがいたので穏便に殺して入った。

「おい、領主はどこだ。いや、どこ、です、じゃ？ いや、ですか？
ううむ、難かしいなあ」

メイド姿の女性がいたので男はできるだけ笑顔で優しく聞いた。慣れない言葉遣いに彼は自分のことながら苦笑してしまう。メイドの女性は張り付けたような笑顔で壁を背に震えていた。

「あ、あちらです」

通じたらしい。男はうれしくなった。

「おおお。かたじけない！」

殺してお礼を言った。その頭を潰してなでなでしてあげたのだが少し彼の手に血が付いた。

「無礼な奴め。気をつけよ」

「体」を城の窓から放り込む。ガラスが割れてきらきらと光る。中庭の花を踏みながら男はいく。あたりに散乱した人間だった者たちに彼は一瞥もくれない。彼は花を見て想い、言う。

「花なんぞ食べれまいに。無駄なことを」

桃色の花びらが風に乗って飛ぶ。その風には血の匂いが染みついて
いる。

城の中に入って前をふさごうとする邪魔なものがあったので魔力で潰して床に敷いた。あとは適当に殺したり、殺さなかったりしながら領主を探している。

「おーい。儂と話し合いをしようーおーい」

のんびりとした声が城の中に響く。彼はドアを片っ端から開けてみて中に人がいたら、勝手に開けたことを詫びてから殺してまたどこかにいく。そうしていると大きなドアがあった。彼はそれを丁寧に蹴破り中に入る。

大きな広間だった。

そこに一人の男が鎮座している。白い法衣をまとった男で、その眼光は鋭い。彼の周りには数人の鎧に身を包んだ騎士がいた。彼こそがこの領地の君主なのであろう。

君主は言った。

「話し合いとはなんだ」

声に重みがある。それを聞いた「あの男」はにこやかに中に入ってくる。

「おお、貴様がここの君主か。探したぞ、話し合いとはほかでもない。儂は無用な争いは嫌なので自殺してくれ。な！ たのむ！」

「……………いかれているのか貴様」

「何を言う。これこそ平和ではないか。自ら命を絶てば無駄なことはあるまい。うむ」

何もおかしいことはないと言った男は頷く。騎士の一人が彼を罵倒したが、その瞬間に彼は魔力で押し潰して殺した。その返り血を鎮座したまま君主は浴びたが、眉一つ動かさない。

「一つ聞く」

「おお。何でも聞け」

「俺が死ねば。どうなるのだ」

「死んだらどうなるか？ 死ぬんじや……ないか？ なぞなぞか？」

「……領民は助けてくれるのか」

「無論だ！」

君主は立ち上がる。騎士たちは止めようとするが彼は言う。

「あれは、何かわからないが……魔性の者だ。お前たちは生きよ。おい、この話し合いとやら、成立だ。俺は自殺する……ゆえに俺以外のすべてを助けてくれ」

「おお！ 平和的解決だ！ 儂はうれしいぞ」

男はうんうんと得意げに頷いた。

その姿を侮蔑したように見る君主の法衣の中から短剣を抜き。首筋に突き立てた。赤い血が噴き出し。それでもその眼光の光はぎらぎらと輝き、男を睨み据えたまま絶命した。

周りの騎士たちは泣き崩れるもの、呆然とするもの。様々であった。反面男はなんで彼らが泣いているのかわからない。男はよくわからないことは放っておいた。

「それじゃあ塵みなごころすかあ」

あくびをしながら彼はいう。話し合いで平和的に解決できたことに満足した彼は、残った者たちはとりあえず殺すことにした。

騎士たちは何を言っているんだと彼を振り向く。

男の周りには邪悪な魔力がほとばしる。彼の体を包んでいく。

その体が膨れ上がり、黒い体毛が生えていく。瞳は赤く光る。どんどん膨れ上がる魔力に比例して巨大化する。広間の天井をばりばりと破り。朝日の光の中この「魔王」は立った。

巨大な黒い牛のようなそれは、その街を蹂躪するのに時間はかからなかった。

☆

業火がすべてを焼いていく。

平和を謳歌していたその街も城も天高く燃える無慈悲の炎が灰燼にかえていく。その中でそれを楽しそうに見る男が一人いた。くすんだ赤い毛の男である。子供のように彼は楽し気に炎を見つめている。

燃やしたいから燃やした。ただそれだけであった。彼はあの君主との約束を微塵も破った意識はない。生きたいものは好きに生きればいいのである。殺すからといって逃げることはできるのだから、死ぬ方が悪い

「随分とひどいことをしたものねえ」

非難しているような言葉にのんびりとした声。矛盾をはらむんだそれは妖艶な響きがあった。男が振りむくとそこには桃色の髪をした女性がいた、彼女は男と同じように顔に文様がある。魔王アスモデウス。不死の魔王だった。

「……ひどい？ 何がだ？」

男は彼女を知っているようだった。

「歴史ある街よ？ 燃やしてもつたいないんじゃないのかしら」

アスモデウスは彼の横に立っている。

「燃やした方が美しい。ただそこにあるだけでは退屈ではないか」

男は男で美意識があるらしかった。彼は近くにあった石を手にもって握りつぶす。ぱらぱらと崩れた石が手から零れ落ちる。彼の顔がてらてらと火に照らされている。

「暴虐の魔王ヴァイス……あなたにもそういうところがあるのね」

アスモデウスが言う。ヴァイスと呼ばれた男はアスモデウスの右腕掴んで握りつぶす。ぶちぶちと音がして血が飛び散った。

「痛いじゃない。ひどいわあ」

言いながら「なんともない右腕」を彼女はさすった。ヴァイスは立ち上がる。彼女の腕を潰したのは気まぐれか、試したのかはわからない。

「不死の魔王とはよく言ったものだな」

「あら、痛いよ。これでも」

ニコニコしながら言うアスモデウス。ヴァイスは聞く。

「まあ、蘇らせてもらったことには感謝する。それで、どこで暇を潰せばいい？ お前のような女なら褒美に抱いてやってもよいぞ」

「あらあら。ほんと自分勝手な奴ね。でもまあ、楽しそうなことを一つ知っているわ。ここから少し離れたところに「てつのまおう」ちゃんという女の子がいるの。その子とその近くにいる男の子を殺してくれないかしら」

「……その鉄の魔王とやらは、面はいいのか？」

「かわいいわよ」

「そうか、まあ、じゃあ抱くかな。魔王などと名乗ったのを思い上がりだとわからせやろう」

ヴァイスは立ち上がる。アスモデウスは少し慌てていう。

「あ、待って待って。貴方がそのまま行けばきつと通り道がひどいことになるわ。私が送ってあげる」

「そんなひどいことはせん」

ヴァイスは心外というように無然として言った。だがアスモデウスはぱんと両手を合わせた。その瞬間、空が陰った。いや大きな何かに太陽の光が遮られたのだった。

それは美しく青い龍だった。煌くその翼を広げ地上を見下ろしている。

「ほう。なかなかよい乗り物だな」

ヴァイスは機嫌をなおして笑った。

☆

城門の前には人がどんどん集まってきた。秋山達を護衛している傭兵とはまた別に武装している集団や荷馬車を連れた商人。または素朴な格好をした者たちもいる。彼等を見ながら秋山は近くにあった手ごろな岩に腰かけていた。

腰かけた時に疲れを感じたが、秋山はふうと息を吐いただけでそれ以上何も言わなかった。

10日、いや朝が明けたからにはあと9日だろう。宣言された魔王襲撃に対する備えを彼は頭の中で何度も考えている。整理していると言いつつ換えた方が正確かもしれない。

彼の横でフードを被って座っているのはその鉄の魔王であるファルブラウだった。彼女は片足を抱くように座っていて城門の前の人だかりを見ていた。彼女の白い足。サンダルをはいているために見える桃色の爪。

城門が開く時間になるまでの時間はゆっくりと過ぎていく。エールをはじめとした傭兵団達は道の端で寝転んでいる者もいる。その中で金髪のエルフの少女エールはマイと何か話している。

秋山が横を向く。そこには無表情のファルブラウの横顔。黒髪が艶やかに光っている。そんな彼女だがグリフォンを倒したときの凄まじい力を考えれば襲撃してくるであろう魔王も同程度以上と「想定」とするべきと秋山は無言で思う。

いかなれば防衛についての用意はファルブラウを防ぐ程度の準備が必要なのである。

「おい」

ファルブラウは言った。

「なんだか失礼なことを考えていないか、おまえ？」

「いや、別に……なあ。この城壁を攻略することはできるか？」

「はあ？　どんな意図の質問か知らんが、私には造作もないことだ。ただ、あそこを見てみるがいい」

ファウブラウが指さした城壁の一点には円形の紋章が刻まれている。

「あれは魔法の一種だな。加護を授けるものでもいえばいいか、簡単にいえば頑丈するものだから、そうだな。中に入って全員串刺しにした方が早いだろうな。なんなら今からやってみせようか？」

フードの下でギリリと目を光らせ、悪意を含んだ笑みを見せる。次に秋山が何を言うかで本当にやりかねないような顔をファルブラウは見せた。秋山は軽く返した。

「お前は9日後を楽しみにしているのだろうか？　お預けしておけ」

むっとファルブラウは顔をしかめる。「言葉選び」が子供に対するようなものだったからだろう。秋山からすれば彼女を抑止できるのは自分の命のみである。逆に遠慮することはないと思っていた。

時折秋山は城壁の上を見る。そこにはびくびくと動く猫の耳をした少女アーエがいた。その栗色の髪と大きな瞳が下を覗いていた。顔の半分は隠れているから、秋山をみているかと表情はわからない。何をしているかはもっとわからなかった。

そうしていると城門が開く音がした、群衆からは歓声上がる。ゆっくりと開かれた城門とその内側に広がっている街並みが見える。城門の入り口は暗い、その先には光が満ちているようにすら見えた。

群衆ががやがやと城門をくぐっていく。

その時秋山の背中を叩く者がいた、みればエールがにと歯を見せ
て笑っている。彼女はやはり何かを話しかけてくるのだが、秋山には
全く分からないから苦笑いするしかない。しかしおそろく「行こう」
と言っているのだろう。

「わかった」

そう答えるとエールも「ワカツタ？」とオウムのように繰り返す。
この旅の道中何度も話しかけられたが言葉でのやり取りはもちろん
できなかった。

☆

傭兵団には教会まで送ってもらった。だからだろう街中は特に問
題なく歩くことができた。秋山は流石に「双剣の少女」などが出てき
たらたまらないとは思っていたが、代わりに「猫耳」が付いてきてい
た。

後ろを見るといつも「猫耳」が見えている。ある時が物陰に、ある
時は荷馬車の間から。かといって何をしてくるわけでもない。秋山
はアーエのそんな動きにほほえましさを感じて笑った。

教会についた。

秋山からすれば聖堂においてヘクターと剣を交えた場所である。
その広場に彼らとマイ、秋山、ファルブラウはいた。

「それでは、これで依頼は完了です。報酬はギルドを通して支払いま
すから」

教会の広場でマイが傭兵団に行った。彼等は安堵したように声を
あげる。それからあつけないほどに淡白に彼らは教会から出ていつ
た。エールだけは秋山のところに来て何かを耳打ちしてきたが意味
が分からなかった。それでもエールはニコニコして手を振ってどこ
かに行く。

「けっ」

聞こえていたのだろうかファルブラウは舌を出してそういった。

「秋山さん」

そこにマイがやってきた。疲れたような、それでも笑顔で彼女は言

う。

「とりあえずお疲れ様です」

「ええ、マイさんもお疲れ様でした」

「教会にいれば安全ですよ。はあ……ほんとなんか、いろいろなことがあつた気がします。それにおなかもすきましたね」

「そうですね」

マイはどことなくふらふらしていた。声もどことなく暗い。傭兵団を解散させて気が抜けたのだろう。秋山は彼女に「ギルド」とは何か聞こうとしたが、やめることにした。代わりにこう言った。

「マイさん今日はもう休んだ方がいい。顔色が悪いですよ」

「……そ、そんなことないですよ、あ」

マイは少しよろめいた。その体を秋山が抱きかかえるように支える。

「大丈夫ですか？」

「……………」

目をみ開いて、ほんのり顔を赤くしてマイは「へ、へい」と妙な返事をした。秋山は彼女を心配した。

「大丈夫ですか？ 部屋まで連れて行きましょうか？」

「え、え？ そ、そんな、そんなのはいいです」

「しかし、あしもとがふらついては……」

マイは「だって、だって、お、お姫様だっこなんて」などと小さな声でいったが秋山に聞こえなかつたらしく。

「おんぶしますよっ！」

「……………」

ほっぺたをマイは膨らませた。

☆

教会の中にはいくつかの部屋がある。聖堂とはまた別の建物だが、石造りの壮麗なものである。

その3階にあるマイの部屋は簡素だった。机と本棚とベッドしかない。そのベッドに彼女は寝ていた。その顔は赤みが差している。熱があるのかもしれない。その横で秋山は椅子に座っている。

マイはその綺麗な目に彼の姿を映す。

「……………」

優しい顔で見てくれているこの青年はわずかな時間一緒にいただけである。ただ、なんとなくそばにいと安心するような気がマイにはしていた。彼女はふとんを掴んで少し引き上げる。顔の半分を隠した。

「マイさん。今日はゆっくりと休んでください」

「すみません……少し、疲れたんだと思います。明日は、パン……焼きますね」

「楽しみにしていますよ」

「……秋山さん」

「はい」

マイは体をゆっくりと起こす。乱れた髪が目元を隠したので手で分ける。彼女は彼をじつと見る。

「なんでもありません」

「……？　そうですか」

秋山は不思議な顔をした。ただ、すぐにいつもの温和な表情に戻って立ち上がる。

「あまり話をしてても仕方ないですからね。疲れには寝るのが一番ですよ。私はそろそろ部屋に戻りますね」

「……秋山さん、もしですね」

「はい」

「眠る間、そこにいてくださいって言ったなら、困りますか？」

「いいえ」

秋山は優しい気に微笑んで答えた。その反応にはなんの迷いもなく、マイは少し残念に思った。それはわがままかもしれない。女性として少しは見てくれているのならば、わずかでも戸惑いがあった方がいいはずだった。

だからマイはむーっとして、

「冗談ですよ！」

まるで兄か父にじやれついているような感じになってしまった。

☆

部屋を出る。長い廊下にはいつかのドアが並び。ガラスの窓から光が差し込んでいる

そこでファルブラウが壁に背を預けて立っていた。待っていたのだろうか。彼女は指で髪をくるくると弄んでいた。

マイを部屋に連れてくる前に教会の者に秋山たちの部屋を用意してもらっていた。ファルブラウと秋山は別室ではあるが隣合わせになっている。

「やつと終わったか。」

秋山に用があったのか彼女はやれやれといった風情で近づいてきた。

「何か用か？」

「いやなに」

小ばかにしたような顔でファルブラウは言う。

「あと9日だな、と思っただけだ。ほら、窓の外を見る。いい景色だろう。ここは高台だから街並みが見える」

秋山は無言で外を見る。数日後に滅びそうなイメージはそこにはない。白い鳥が一羽空で遊んでいるのが見えた。ファルブラウは言う。

「あの小娘。言葉通りの小娘だな。だが、お前には継る相手があればいいはずじゃないのか？ 変な気を遣い、聞くことも聞かず巻き込むことを嫌がっている。ああ。晒えるなあと、思ってたな」

そんな嫌味を彼女は言いに来たのだろうか秋山は彼女を一瞥してから、また窓の外に目をやる。教会の敷地は鉄柵でおおわれているようだった。マイと同じようにローブを来た者たちが動いている。

その鉄柵の傍で中を伺っているものがある。金髪が遠目からも分かりやすいエールだった。

「何をしているんだ。あの子は」

「……」

ファルブラウはふんと鼻を鳴らした。

☆

秋山は一度部屋で用意された上着に着替えた。さすがにボロボロになった服は脱いでシャツを着る。生地は多少ゴワゴワしているが見た目は簡素である。動き回るには不自由はない。それから中庭に出て、鉄柵の向こうに待つていたエルフの少女に向かっていく。

みれば彼女は頭に花の飾りをして半透明のケープを羽織っている。

丈の短い上着とズボン。足には紐が文様を形作るサンダル。白い肌が少し露出が多いと秋山は思ったが、はしたないと頭を振った。

彼女は秋山を見ると手を振って、歯を見せて笑う。何かしら言っているのはおそらく挨拶だろう。

「どうしたんだ？」

と聞いても秋山の言葉はわからないだろう。エルフは手を鉄柵にかけてにやにやしている。その顔は何か隠し事をしているような、楽しんでいるような顔だった。

「イツシヨ、ゴハン。イコーっ」

「？」

秋山は息を、のんだ。

その顔にエルフは満足したようにくすくすと笑う。彼女はさらににやけた顔で言う。

「アキヤマ、オドロイタ？」

日本語を話している。秋山は心底驚いていた。彼女はここ1日程度秋山とマイやファルブラウとの会話を聞いてり、無駄に話しかけて聞いたりしただけだったのだ。

（いや、無駄に？）

秋山は思う。

（俺の反応を試していたのか……。そこで言葉を拾っていった……。？いや、そんなことできるものか？）

エルフは妖し気に笑う。半透明のケープで顔の半分を隠してくすくすくと笑う。

「ドゥシタ？」

べつと舌を出す。左目でウインクする。

エルフとは聡明であるとマイは言った。秋山は、

「なるほどな」
笑うしかなかった。